

第二十章 小倉實澄蔭涼軒を訪ひ諸僧と會す

長享二年六月十一日小倉實澄は上京して相國寺を訪ひ横川桃源春陽光伴等名僧と會食し席上詩を賦し興し夜三更に至る。實澄畫に題するの詩あり。諸僧等其の佳調を感じ僧と雖も及ばざる名吟なりと嘆賞せり。

蔭涼軒日録 長享二年

六月十二日

昨日於方丈小倉左近將監相會有齋桃源春陽光伴横川有句云老髯敲丈室相國不盃茶桃源云雨秃成叢社盧山五咲花月嶺云暑須傾漢洗春陽云年只繫時加云々小倉題畫有二詩云

積雪半空山一層、茆簷相對鬢鬚鬢、往還路熱前村寺、欲問爲梅持咒僧、雖云僧不及之云々、及三更歸出門送之、

第二十一章 景徐桃源に代り小倉氏の女正

波尼の香語を撰す

月心正波尼は小倉氏の女なれども史料の徵すべきなし。僅かに左記香語により小倉氏の族にして二男二女ありしを知る。某年七十歳にして歿す。景徐周麟は桃源瑞仙に代り其秉炬の偈を選したり。

翰林胡蘆集

月心正波禪定尼秉炬代桃源

性海無風自起波、發光萬象及森羅、素娥幾夜伴明月、織女何年度絳河、共惟某得此三昧歸之上科鬱々廿四郡、近江託身小倉甲族、峨々三千比睿濡耳、大乘芬陀、一陰一陽、雖分奇耦、二男二女不隔自他、堂上慈顏、咲酌摩耶酒、人間愛別、忍賦廢廖歌、常在鷺嶺、與佛同生、將謂掩面城東老母、恰值鳳林共師、相見元來、回首濟北阿婆盃、盞以驗、四來舉足、下足神通、妙用受木叉而守八敬、在家出家、布薩羯磨、星移物換、人生七十、花雨地動、龍女剎那、佛見法見、總是不是、涅言槃言如何、若何、或時金針玉線、刺出隱密田地、或時劍樹刀山、鎔成吾家太阿、到這裏、看正波禪定尼、爲諸人、援溺救焚、麼舉火把云、丙丁童子、哆々和々、

第二十二章 景徐湯山に小倉實澄の一族と

會し狀を實澄に報す

第二十二章 景徐温泉に小倉實澄の一族と會し狀を實澄に報す



景徐周麟衰病あり温泉場に入湯療養す。會々隣樓に鬚髯美の偉男子あり容姿頗る小倉實澄に似たり。始めは浴桶異なりしが漸く親むに及び景徐を招きて同浴場に入らしむ。是に於て景徐は其姓氏を問へば近江の人にして小倉氏なるを答ふ。景徐大に驚き小倉實澄の事を談すればそは我宗家なりと云へり。二人は更に親密となり種々の世事を談じたり。景徐が同行に梅叔法霖雲屋祥公等數輩あり。共に奇遇を喜び聯句を賦し之を托して實澄に送る。其詩傳らずと雖も其文存す豈傳へざる可けんや。

翰林胡蘆集

寄小倉居士

予過於曩時者衰病耳前月廿一日取途於湯山廿二日入山借閣而居焉浴後凭欄有一武夫亦凭欄而立髯髯似足下而未班夾路與語髯之所入者一湯也予之所入者二湯也髯使使延予以入我之所入之湯者一再問其姓曰小倉問其國曰近江予愕然心想足下口及足下髯曰吾宗也近日有書戲而曰方今日本國非君子之可居之國也聞有遣唐使事附舶浮大洋可乎予咲曰實足下之語也而詳封內按堵如故又知動止佳況可喜矣因托之寄書去從予入湯者數輩曰雲屋祥公首座曰梅叔霖公藏主皆吾道佳衲子也執觚

哦詩燒薪聯句遂俾予不能嘿止於其間所以有此也二公之詩可見矣客舍忽忽借手寫之故供高覽者止于予此詩耳賢察抑寬夫栢舟二大老尊侯萬福予去歲所遣之書曰二老無恙則山上之屹然無恙者也請爲予致意幸甚髯十二日出山予十三日出山彼此草々詩尾有餘地不別裁書一狀領過蓋非詩跋也臨風悵然宜竹野衲再拜上呈松齋居士仗下

第二十三章 小倉實澄横川に像贊を請ふ周興彦龍代作す

延徳二年七月小倉實澄は自像を畫かしめ之を携へて入洛し横川景三を訪ひ行狀一卷を添へて贊辭を需む。横川即ち法嗣周興彦龍をして代作せしむ。全篇を通讀すれば實澄の事蹟と人格を詳知するに足る。贊辭左の如し。

半陶藁卷一

小倉將監實澄壽像贊

隨緣居士實澄姓源氏清和廿五世華胄也十八代祖正親食邑江州小倉故族以邑爲稱焉居士法諱正綱道號文紀拜悟空塔受衣孟宗門金湯也而與余遊方之外有宿契焉一日宰軸請贊視之壽幀也有行狀一卷出處顛末燦然星如羅蓋在常人則得一二而足者



在居士則不爲芥蒂也。且北禪作字說文斗山也。居士有齋曰松牧。亡友桃源作記有庵曰識廬。余又作記。行事可言者。豈有遺蘊哉。居士試壁數幅。中安此像。往復讀之。傳論贊頌。董孤斑馬。盡美盡善。余尙區々。何以瀆告乎。請而不可。有一言以蔽之者。標而書之爲贊辭可也。北禪字說曰。廿四郡有一忠臣。以比顏魯公也。應仁文明之間。天下群雄爭起。朝漢暮楚。變化難測。而江之爲州。二龍之野。兩虎之窟。執所使然也。唯居士砥立頹波。一日不黨賊。守八尾城。帷幄決勝。領蒲生郡。絃歌傳聲。故東山相府。賜內書兩通。嘉賞焉。嘗避寇往伊州。見梅花。作詩藹然。忠義浣花。杜甫人皆誦之。北禪所謂一忠臣者。不誣矣。受騎射業。入多賀氏之室。習歌鞠藝。升飛鳥井之堂。私第架亭。楓林裏之。榜以昨薄。取於定家小倉山之詠也。平生所作歌詩。成卷軸者。曰昨薄殘葉。先是宰詩藁。求余添削。胡比亂判。略加管見。因題一詩。證桃花相公和之。附錄焉。初余東遊集中。載居士詩數首。北禪見之。曰。詩皆好微。言皎日可謂華矣。加之呵罵。黃頭碧眼。接待白足赤髭。披毳衲入寺。解玉帶借床。殆無虛日。有髮僧也。垂鬚佛也。寬夫柏舟二師。山林典刑也。居士親炙之。而祖意教意。內學外學。所得多矣。又桃源爲居士講大惠書數有。勵策宋儒宗。朱晦翁晚歲篋中所有。只大惠語錄一編而已。是所以居士留意於此也。蚤會無功德。話以建寺度僧。爲念禪。有黃梅教。有西尊廢磔沈刑。居士垂手扶植。輪奐一新。其如此則積善衰々。躬致三貴。慶流萬世者。故而可待矣。唐呂溫著凌



隨孫小位五正贈  
 崇儒改佛苑來安於  
 後發靈白而冠美  
 論鄂個妙衣宋名公  
 呼像流好色瓦朱風  
 當希美政此兒他切  
 喬胤枝葉松在祝款  
 禪初橫川版

贊尚和川橫・像畫澄實倉小位五正贈  
 のもしめしせ刻模が齋巽村木年元明天  
 藏所氏助兵倉小 村姫虎郡井淺東



烟功臣贊、贊序<sub>ス</sub>二十二人、履歷於前而各系一語於後、異哉、吁、房杜不言功、吾於居士亦云、  
贊曰、

僅消數番紙耳、余爲居士、

發者<sub>スル</sub>忉忉<sub>ト</sub>到此、猶如不足、

鬚髮雪白、面顏春紅、尋漢人譜、大倉々公、分倭歌體、定家々隆、文武兼備、

偉續豐功、孫枝子葉、松在祝融、

延德二年七月吉辰

前南禪横川書

## 第二十四章 景徐市村慈眼庵の觀音を開眼供養す

市村<sub>愛智川町  
大字市村</sub>に慈眼庵あり、慈雲庵とは別なり。應仁文明の間同庵の尼僧松蔭慈鶴  
工に命じ觀世音の像を彫刻せしめ工就りし日最徐周麟を請して開眼供養を修した  
り。供養香偈其著宜竹殘稿中に見ゆ。左に抄出す。

宜竹殘稿

觀音像供養

大日本國近江州愛智郡市村慈眼庵頭尼首座命工彫刻觀音大士像請予以伸供養、



其偈云、

蓮華思眼柳思眉、三十三身他是誰、將謂南無觀自在、元來東海比丘尼、

### 第二十五章 景徐市村慈雲庵の岩桂慈昌尼を弔ふ

市村備後守の一族が創立せし市村の慈雲庵に岩桂慈昌尼あり。市村年登居士名不詳の子後の桃源瑞仙幼名不詳が二歳の時永享三年其母病歿す。遺命して桃源を僧たらしむ。桃源四歳の時慈雲庵に移され岩桂慈昌尼の保育を受けたり。故に桃源の慈昌尼に於けるは慈母に等し、桃源其恩を忘れず常に慰問せり應仁文明の間九十歳の高齡を以て歿す。桃源は景徐周麟を請ひて導師とし懇に葬吊せり。其香語翰林胡蘆集に見ゆれば左に寫出す。

#### 五山文學全集

岩桂慈昌禪定尼預修秉炬佛事

慈顏嗽桂久昌々、是比總持曾產梁、葉落歸根非借斧、一輪心月更清光、共惟岩桂慈昌優婆夷、如梅無恙似菊有芳、通家田里野村、市村懷朱陳嫁娶之始、擇婿江州南郡北郡、擅和漢詠歌之場、落髮作尼一女子結髮奉主兩侍郎、恩越萱親育桃源、致之長老職志祖叢社

拜竹所列于弟子、行未披羽衣塵々上界不刻蓮漏念々西方抹過三千刹土、斷送九十星霜、畢竟涅槃、一路々頭、在何處、舉火把打圓相云、日月盈昃、星宿列張、本來無碍、隨處還鄉、喝一喝

### 第二十六章 景徐市村慈眼庵の慈鶴尼を弔ふ

松蔭慈鶴尼は市村氏の女にして名僧桃源瑞仙の異母妹なり。幼にして慈眼庵に入り髪を削りて尼となり天英禪師を師とし慈鶴と稱し後に桃源より松蔭の字を得終生同庵に住したり。永正九年六十七歳を以て寂せり。桃源は友僧景徐周麟を請して其吊師たらしめたり。左記香語は能く其顛末を明にす。

#### 翰林胡蘆集

松蔭慈鶴尼首座預修秉炬佛事

白鶴曾栖有此枝、双林樹下臥如來、四榮枯外一眞實、不作人間連理姿、江州市村慈眼庵頭、松蔭慈鶴尼首座、幼拜天英禪師命之曰慈鶴、族兄桃源師、字之曰松蔭、今令予說厥義、且來秉炬法語、辭弗獲一狀、領過、共惟松蔭鶴公首座、棄恩割愛、削髮披緇、江左風華、親出望族、天下英物、早承名師、霞裁服來、舊衲衣、何須金襴、獻佛雲蒸飯、其大齋會、獨許鐵磨、稱尼心清淨、即具戒定惠智、莊嚴頓離貪嗔痴、六十七歳、不生不滅、三十二身、大慈大悲、遊



戲十方佛土、元來一念僧祇、舉火把云、三昧火從何處起、紅動桃花好面皮。

### 第二十七章 足利義尙の佐々木高頼親征と當郡

長享元年將軍足利義尙は佐々木六角高頼が將軍の命を奉せず國內の諸莊園を冒占するを以て遂に親征の帥を出す。分國の諸將皆召に應じて上京す。九月十二日義尙は室町邸を出で坂本に着陣すその詳細は栗太郡志卷一に記したれば省略す。當時近江武士は京極政經も高濑も召に應じて從軍したること、常德院殿江州動坐當時在陣衆着到に署名されたれば當郡の武士も必ず其部下に參じたらん。然れども早く幕府の執權たる細川政元が歎を高頼に送り軍情を密報するにより戰機熟する頃高頼は遠く甲賀山中に隠れて敵鋒を避け、天下の諸將士を率ゆる大將軍が近江半國の守護たる一の高頼を討伐する能はず滯陣年を重ねて終に鈎の陣中に薨去せし程なれば士氣振はざる兒戲的對陣なりき。されど大將軍の出陣なれば國內の大社大寺よりは陣中に伺候して慰問し將軍は又社寺に對して軍勢の亂妨狼藉禁止の制札を與ふる等栗太郡鈎の陣所は京紳以下各種階級の去來に市を爲せり。當郡内當時の史料存するもの僅かに金剛輪寺の臺所帳なる下倉用帳中に片影を留むるに過

ぎず。先つ其要を抄せん。

#### 金剛輪寺下倉米錢下用帳

長享元年

百文

制。札。板。同。大。工。

二百文

公。方。様。御。判。可。申。由。御。衆。議。ニ。テ。實。養。房。<sup>(鈎)</sup>まがりへ御出時、神子田方へ禮、

百四十文

同時使節路錢、

壹貫三百文

京極殿より御懸、樽桶十三荷代、

四貫四十文

同時酒代

二百文

京極殿より十三荷樽御懸時、路次ニテ人夫□□

五十文

同時路次茶代、人夫訴訟申間下、

七十文

多賀新左衛門殿より廿貫錢被懸時、箕浦殿ニ付佗事申間、札樽肴代、

二百四十六文

同事ニ付水口へ年行事御出路錢、

五百文

公。方。様。御。動。座。ニ。付。鞍。智。殿。より。樽。御。借。用。間。樽。桶。代、



一貫五百五十文 同樽五荷酒代  
 三百文 結城殿へ樽桶三荷代  
 三百文 同時樽桶木一段と衆議之間、サハラ木  
 八十文 同時ニ神子田方へ肴代  
 二百文 多賀新左衛門殿へ遣鐵輪代、太夫渡候  
 八百文 同新左衛門殿中間小者方へ酒手出ス。  
 五十文 同新左衛門殿ニて仕ル番匠手間料  
 二百文 制札筆者方へ  
 七百文 京極殿様千手寺御陣時、御禮樽酒代  
 百文 同時肴代  
 二百文 同時奏者方へ八樽代  
 八十文 同時肴代  
 二百文 同樽桶代  
 二百文 河村方違亂ニ付酒手九月二十四日  
 二百文 市村四郎兵衛殿へ遣八樽代 同二十五日

八十文 同時肴代  
 六十文 同時、年行事路次茶代

中略

八十文 島山殿より陣(替カ)の時多賀新左衛門殿より違亂被申候間、禮樽時肴代、十一月廿五日  
 二百文 同時年行事、路錢上下五人  
 七十五文 同事ニ付上使河瀬彌四郎殿迄酒三升、不足□  
 廿四文 同事ニ付衆會時肴豆布代 同十一月九日  
 廿文 廿貫文錢事、方々談合、兼日衆會肴 同廿一日  
 百文 京極殿水口に御陣付、御禮樽肴、十二月六日  
 八十文 同時奏者樽肴代  
 二百文 同時樽桶代  
 八十文 同時多賀新左衛門殿へ禮樽の肴代  
 八十文 同時奏者樽肴  
 三百十五文 同時、年行事路錢上下九人一宿雜用



壹 貫 文 奥山備前方折番錢、鞍智殿へ渡ス

百 文 同事付、定使左衛門方へ下、

百 文 三月十日 京極殿様へ御禮樽肴、甲賀より御歸陣ニ付、

以上の記事は金剛輪寺にて今度の軍事につきての各種支出を記せしものなるは其附記によりて知らる。今その二三を説明せん、制札板同大工、多賀新左衛門殿遣ス鐵輪代、又「同方番匠手間料」又「制札筆者方」等あるは九月の始め將軍義尙出陣の際に國內の神社寺其他團體等へも陣奉行より禁制を出せし時の記事にて金剛輪寺や百濟寺永源寺へもその沙汰により制札の板を大工に製作せしめ多賀新左衛門方にて制札場の作事を依頼しそれに要する鐵輪をも作成し而して筆者の謝禮をも支出せし記録にて當年の制札は栗太郡金勝寺や甲賀郡石部町の長壽寺等に現存す栗太郡志甲賀郡志參照其文を借りて金剛輪寺のものとするれば左の如し。

禁 制

近江國安孫子庄内

金剛輪寺

一 軍勢甲乙人等、亂妨狼藉事

一 伐採竹木事

一 苜取田畠事

右條々、堅被停止訖、若有違犯之輩者可處嚴科之由、所被仰下也、仍下知如件

長享元年九月三日

前加賀守三善朝臣花押：飯尾加賀守

丹後守平朝臣花押：松田丹後守

次に「公方様御判可申由御衆議ニて實養房まがりへ御出時神子田方へ禮」とあるは寺領安堵の御判にても得ん爲に寺僧の衆議により實養房なる者が使者となりて栗太の鈎の陣所に伺候せし時取次人の神子田某に禮錢を贈りしをいふものなり。  
次に「多賀新左衛門殿より廿貫文錢被懸時、箕浦殿ニ付佗事申問云々」廿貫文錢事方々談合兼日衆會肴とあるは出陣に付京極家より軍資金を廿貫文同寺に懸けられたれば京極家の家老箕浦次郎左衛門を頼みてその出金の輕減を交渉したる記事と、其依頼の功も無く二十貫文の調達を強要されたれば方々に相談して毎日衆會を重ねたるを云ふもの、次に「公方様御動座ニ付鞍智殿より樽御借用間樽桶代」同樽五荷酒代とあるは將軍出陣につき五荷の酒樽を持參して御陣見舞に贈り、其樽を鞍智云々京極家の同家にて安孫子庄に領地を有せし家にて借り用ひしを云ふものなり。



次に「結城殿へ樽桶三荷代」同時に樽桶木一段と衆議之間サハラ木とあるは將軍の御供衆結城七郎新助の陣所へ三荷の酒樽を贈るに樽を普通の物より上等に作らんとの衆議に付榧の材にて作らせしをいふものなり。「畠山殿より陣替の時多賀新左衛門達亂云々」とあるは畠山中務少輔と結城氏と同じ御供衆の一人にて陣替と云ふは將軍が栗太郡安養寺治田村安養寺の陣より鈎の眞寶館治田村下鈎の内蓮臺寺中の別館に移陣せしを云ふにて此の移陣は長享元年十月二十七日に行はれたり。

次に「京極殿より御懸樽十三荷代」同時ニ酒代「京極殿より十三荷樽御懸時路次ニて人夫云々」とあるは京極家より出陣に付酒樽十三荷を同寺に陣見舞として出すべきを強請沙汰を受けて出せしにて酒代四貫四十文樽代壹貫三百文を要したるを記す。此くてその京極家は出陣して先づ犬上の千手寺に陣したりと見え七百文京極殿様千手寺御陣時御禮樽酒代「同時肴代」同時に奏者へ入樽代「同時肴代」同時樽桶代「等ありて合計一貫二百八十文の支出を要したり。十一月末日には京極殿様は甲賀水口へ南進陣替したりとて更に又京極殿水口え御陣付御禮樽肴十二月六日」同時奏者樽肴代「同時樽桶代」同時多賀新左衛門殿の禮樽肴代「同時ニ奏者樽肴」同時に年行事路錢上下九人一宿雜用等と陣替りにつき京極主人公と其の奏者家老の多賀新左衛

門や其奏者等へ各々酒樽を贈り寺の年行事の僧以下九人連にて水口まで陣見舞に行き一宿して歸りしを記す。かくて翌年三月歸陣につき京極殿様へ御禮樽肴甲賀より御歸陣に付と見え歸陣祝賀禮を送りたり。此外市村四郎兵衛殿へ遣ス八樽代「奥山備前方折帑錢鞍智殿へ渡ス」等の記事ありて市村氏へ陣見舞や奥山方へ折帑錢等を支出したり。戰國時代の寺家が此の如く將軍家以下守護や地頭や寺領の縁故等ある地の武家には各種の禮物を贈りて寺門の安泰を圖りたる窮狀は到底今人の思ひ及ばざる所ならん。

右は金剛輪寺の一例なるが百濟寺、大覺寺永源寺は除外地、其他西部にても普光寺や延壽寺、豐滿明神、客人明神、長野大領神社等にも同じ禁制札を建てられて各種の禮錢を要求されたるべく、勿論諸莊園にも軍用金として矢錢と稱する家屋稅、段錢と稱する土地稅を徵發され、或は兵糧米を賦課せられ又陣夫と稱して軍役の人夫にも使役され、戰爭は常に武士のみの苦勞にあらず國民全部の痛困事なりき。

### 第一節 幕府攝津政親に鯉江安藝入道跡の地を安堵す

足利義政が當郡鯉江安藝守入道の舊領地を攝津中務大輔政親に知行せしめしこ



とは前章第七編既に記せり。長享元年九月將軍足利義尙が佐々木高頼を親征するに際し先づ奉行人をして同地安堵の事を政親に沙汰せしめたり。左記史料即ちそれなり。

士林證文

近江國鯉江安藝入道跡事當知行之處、守護押領云々、既被加退治之上者、早如元可被全領知之由、所被仰下也、仍執達如件、

長享元年九月十六日

前加賀 守花押……飯尾清房

丹後 守花押……松田秀興

攝津中務大輔殿

第二節 幕府臨川寺領となりし元鯉江氏の所領押立

保内横溝郷を同寺に安堵せしむ

元鯉江筑後守の所領地たりし押立保内横溝郷は先に將軍家より京都嵯峨の臨川寺に寄附されしが近江守護佐々木高頼が國內諸庄園を横領せるにより之を親征する將軍足利義尙は長享元年九月二十六日奉行をして寺領安堵の旨を沙汰せしめた

り。左記二通の文書是なり。然るに此地は二階堂政行の知行地たること分明せしにより更に次節の問題を生じたり。

臨川寺文書

近江國愛智郡鯉江跡所々事當知行之處、守護押領云々、既被加退治之上者、早如元可被全領知之由、所被仰下也、仍執達如件

長享元年九月廿六日

前加賀 守花押

丹後 守花押

臨川寺雜掌

臨川寺文書

臨川寺領近江國鯉江跡除押立保内横溝郷事當知行之處、佐々木前大膳太夫高頼押領云々、既被加退治之上者、早如元可被全領知之由、所被仰下也、仍執達如件

長享元年十二月廿日

前加賀 守花押

丹後 守花押

當寺雜掌



第三節 幕府押立保内横溝郷を二階堂政行に知行せしむ

押立保内横溝郷は二階堂山城守政行の所領なりしは蔭涼軒日録寛正五年三月十七日の條に、

二階堂山城守知行、江州押立保郷民等、就用水之事、及弓矢合戰、仍可御成敗之事云々、

と見ゆるによりて知らる。然るに其後幕府は横溝郷を山城國嵯峨の臨川寺に寄進したり。政行其非を訴ふ。長享元年十月幕府は所置の誤りたるを知り元の如く二階堂政行に還附し、其替地として佐々木高頼の舊領尾張國上門郷を臨川寺に寄附したり。横溝郷は年貢八十石の收入なるに上門庄は三百貫の收入なりと見ゆ。二十日幕府奉行人は其旨を臨川寺雜掌と當郡々奉行鯉江氏へと沙汰したり。

蔭涼軒日録

近江國押立保内横溝郷事、就由緒被返、二階堂山城前司政行朝臣訖、早可存知之由、被仰出候也、仍執達如件

長享元年十月廿二日

貞 通判

爲 修判

鯉江殿

十一月三日の條

天洒小雨、臨川寺領奉書案云、

近江國押立保内横溝郷事、就由緒被返、付二階堂山城守政行朝臣之間、爲替地、尾張國上門真庄、佐々木大膳太夫高頼跡、被寄進訖、早任先例、可被致其沙汰之由、被仰下候也、仍執達如件、

長享元年十月廿二日

信 濃 守判  
肥 前 守判

臨川寺雜掌

閏十一月三日の條

去月廿二日於江州鈎之御陣、參之次住、二階堂山城守陣所、山城守對面話云、當國押立保内横溝事、依有由緒被返之、臨川寺に者、佐々木大膳太夫高頼本領、尾張國上門庄爲替地被遣之也、自然從寺家、白子細有之者、可被意得之由云々、横溝事者、寺納八十石許、歟、上門事者、國之時宜不存知、内海白分者、三百貫仁可請切云々、然者、三増倍之地歟云



々、

其後臨川寺より横溝郷につき幕府へ訴へし所ありと見え同録延徳元年十一月四日の條に左の一章を見る。

二階堂行二公又來、於書院勸盃、二獻過歸、蓋江州押立保事、臨川寺訴訟迷惑之由、佗事有之。

#### 第四節 京極政高京極高濂と松尾に戦ひ黄和田

に敗走し伊勢に隠る

長享二年京極大膳太夫政高は同族高濂と當郡松尾に戦ひ利あらず。山を越えて政所谷に出て黄和田に走る。重臣多賀新左衛門は八風峠より伊勢に通れ梅戸に隠る。

#### 蔭涼軒日録

長享二年八月七日

今月四日、佐々木大膳太夫殿出奔云々、不識其實不實也、多賀新左衛門尉者、伏伊勢國梅津云々、薄暮香陽來、茶話移時、佐々木光祿太夫有雜說乎、去四日夜俄出奔、山中閑道

於者七里伊勢之堺黄蘗ハタト云所迄北走多賀新左衛門尉者先光祿北走云々、

#### 江北記

一長享二年八月に光祿中郡松尾迄御出張候、然共被失利を御取退也

黄蘗村はきわた村にて今の東小椋村大字黄和田なり。黄和田共有文書永祿天正頃のものに黄蘗村と記せしもの數多く存す。政高の子治部少輔材宗は此地に根據地を置けり。(後章詳記)

大字黄和田に小字城の腰の地名存しその背面上に砦趾あり戰國時代城砦の遺趾なり。今にして思へばかゝる不便の山中に何の必用ありて城砦を設けしやも疑はるも此の史料によりて城砦の所以も理解さるゝなり。

松尾より秦川山中を奔りて政所畑に入りしは角井峠より大萩に出て政所に通じたるものならん。大萩に村山氏住し丸山と稱する山上に砦趾存す昔時の交通と城砦の配置寧ろ驚く可きなり。某年十二月一日の金剛輪寺下倉米下用帳に

京極殿より畑へ秦川山路送候へと折帑持來、中間、酒食所望間、如此、の一句あり。京極氏より秦川山道を政所畑へ道案内を依頼する折紙を持って中間が寺に來り其の所望により酒飯を出せしことをいふなり。月日相違すれば此時のも



のには非れども角井峠の交通を案内せしものなり。

第五節 京極政高小倉修理亮をして兵を小椋谷に出さしむ

前章に記せし戦敗の將京極政高は伊勢の梅戸館に通れ居りしが翌三年の春に入り八風峠の雪も消えんとする頃近江歸陣の第一策として政所畑口の敵を掃はんことを小倉修理亮に依頼したり。

稻村下岡部栗田幸平氏文書

就今度江州退散、自最前懸隱勢州梅戸館堪忍實以神妙至ニ候、仍而畑口之勢遣(可脱カ)に被(可脱カ)打向降人、然者必可抽賞候也、恐々謹言、

二月八日

政 高

小倉修理亮殿

第二十八章 僧景徐小倉實澄が桃源の死を

哀悼するに答ふ

相國寺八十世となりし桃源瑞仙は延徳元年十月二十八日京師の崇壽寺に遷化する。

桃源は當郡市村の人市村備後守の族なり。應仁の亂起るや桃源は横川と景徐とを伴ひ市村の避難處慈雲庵より永源寺の溪奥龍門庵に移り寓し景徐や横川が歸京後も獨り龍門庵に留りて書を著し文を講じ愛智川上流の仙境に文教を鼓吹し友人の歸京を促すも應せず一住遂に十五年の歲月を送りたり。其間小倉實澄とは特に會心の誼を結び實澄は桃源の爲に生計の資を援け桃源は實澄の爲に文を講じ禪を談じたり。故に桃源の死報を聞きし實澄は哀悼他に異なるものあり慇懃書を裁して使者を遣し香資を添へて景徐に送る。十一月二十七日景徐は其書を披見し千言の愁辭に落涙し依て己れと桃源との既往を懷古し病起以後の狀況を詳報し且つ記念として桃源が加點せし才子傳二冊を贈りたり、左記文章を通讀すれば文の高佳なると情緒の濃なるを髣髴せしむ。松牧居士は實澄の雅號竹所は桃源の別號小補は横川のことなり。

翰林胡蘆集

答松牧居士書

再拜復于松牧居士大床下、今月念七日、手教至此披而讀之、從頭悼竹所和尚遷化、千言懇々、不覺老淚承睫、因憶應仁丁亥之秋、竹所拉予與小補避亂於飯高山中、預約居士迎

第二十八章 景徐周麟小倉實澄が桃源の死を哀悼するに答ふ



笑於清泉白石之間、遂借庵以居、予無何下山省親、小補數年之後亦下山、唯竹所一住十五年、柴足水足、所以居士檀力之使然也、書中所謂、日々入山不聞木蘭之鐘、時々過橋有舉蓮社之蓋、其頻々顧問可見也、辛丑之春、予奉洛下諸老之命、入山起之、竹所堅拒之、百計興致、然而始終不忘山中者、見于詩矣、見于身後之手簡矣、法幢入洛以來、涉九伏、龍乘拂前板、瑞世景德一領等持帖、再視萬年篆、加之、執院務者、三四處、鉤斧不閑、殆倦應對、與予每語曰、我必稅駕於山中、洛社縑素惜其去、盡如居士道伴招之功者、以故因循、去夏萬年、搥退道體、不安僧官、強守崇壽祖塔、力疾就之、禪誦如常、九月晦日、營忌齋、大衆會之、出接揖座、揖香、翌晨、命駕歸村院、小軒倒臥、橫眠、頗愜于病懷、予與二三子、日々侍常談、道論文、談笑自若、十月二十八日、五更坐化、左右一慟、諸山皆曰、滅世間眼、識與不識、哭之、予自十四五歲、如影隨形、恩義泰海、俄然棄去、爲之奈何、萬々憐察、承聞於識廬、追嚴道場、東川春榮、錦溪、袈裟衝雪、可想矣、青銅一緡、副書見寄、供之影前、在彼在此、益知情態、一韓蓮甫二藏主、後事不怠、梅童子無恙、借重惟幸、才子傳二冊、所其手親加朱點者、與二藏相謀、奉獻、使者急歸、點燭臨紙、紙短、意長、閣筆耳、

第二十九章

足利義材の佐々木高頼征伐と當郡

足利義尙の佐々木高頼親征は長享元年より延徳元年迄三ヶ年に互りしも戦果を収むる能はずして義尙は陣中に病死せり。義尙の後を襲ふて將軍となりし足利義材は前將軍の志を繼ぎて再び高頼親征の師を出し延徳三年八月分國の諸將を率ゐて近江に入り佐々木氏の軍と諸所に戦ふ。その詳細は蒲生郡志卷九に記し置けり。郡内大寺大社が陣見舞や矢錢兵糧の徴發に遇ひしは長享元年の時と同じかりき。左記神崎郡に在りし鯉江高眞の舊領地を臨川寺に安堵せしは出陣當初の沙汰狀なり。

臨川寺重書案文

臨川寺領、近江國神崎郡鯉江筑後守高眞跡但於横溝郷者屋敷、山林、名田、畠、所々散在等事、當知行云々彌可被全領知之由、所被仰下也、仍執達如件、

延徳三年九月十七日

加賀前司在判  
散 位在判

當寺雜掌



第一節 幕府安富元家が金剛寺築城の竹木を永源寺

に課するを禁ず

八月二十二日足利義材は細川政元をして近江の守護を兼ねしむ政元即ち部下安富筑後守元家を遣はし近江の諸務を管理せしむ。元家近江に來り蒲生郡金田庄金剛寺に將軍滯陣の城砦を築く。即ち所用の竹木人夫課役を湖東各郡に課す當郡にも其徵發を受けたり。然れども永源寺は將軍家より臨時課役を免除されし所なれば寺の雜掌は事由を幕府に訴へたれば十二月十一日幕府奉行人は元家に左の狀を送りて永源寺及び同寺山中より竹木徵發を禁止したり。二十九日元家更に其旨を郡奉行高橋三郎左衛門に傳ふ。

永源寺文書

近江國山上永源寺並山中事被相懸竹木云々帶嚴重御判等證文有各別之子細上者、早被停止催促更不可有遲怠之由也仍執達如件、

延徳三、十二月十一日

清 房花押  
春 貞花押

安富筑後守殿

永源寺文書

十二月廿九日御奉書

近江國山上永源寺同諸末寺領所々散在等事任代々御判之旨可爲守護并諸本所使者不入地之段任去十月九日御下知之旨宜被存知之狀如件、

延徳三十二月廿九日

元 家（安富筑後守）

高橋三郎左衛門殿

第二節 愛智川の戦と愛智武士の戦死

近江南郡所々の戦は回を重ねて幕軍漸次北進し明應元年三月十九日は愛智川原の大合戦となりたり。南方より進みし幕軍は河南神崎郡の築瀬に陣したれば此の戦を築瀬合戦といひ北方近江軍にては愛智川の戦といへり。愛智川原の戦は初め幕將安富元家兄弟築瀬に陣せしを近江軍が夜襲して火を放ちしに始れり。足利軍は三隊に分ち斯波義寛の軍は織田敏定を將とし、赤松政則軍は浦上則宗を將とし、武田元信は逸見彈正を將とし三方より進み元家の陣を援け進んで近江軍と戦ふ。京



極氏も今次の戦には高頼に味方したれば愛智以北の將士雲霞の如く集合し其數四千人に達し。兩軍大に愛智川に戦ふ已より午に至るといへば午前十時より正午迄の血戦なり。此くて近江軍敗れ目賀田次郎左衛門、小倉彈正、高野瀬備前守、山崎源太左衛門、小川氏、築瀬氏兄弟、三井兄弟、九里氏一族三人を主とし、九十餘人戦死し屍を愛智川原に曝したり。京軍の報告によれば元家の手に頸六十七、敏定の手に七、織田與十郎の手に十、則宗の手に六合計九十頭にて將軍義材は諸將の戦功を賞し感狀と太刀とを與へたり。左記蔭涼軒日録の記事と織田與十郎の子孫に傳はる感狀は此戦の記念史料なり。

蔭涼軒日録

明應元年三月廿五日、不參、天快晴、早旦、秀才自御陣歸、條々書立、皆達之、赤松公、武田、織田大和守、可超、大湖之命有之、敵蜂起云々、

四月朔辛丑去月廿九日、於江州愛智河原神崎郡有大合戦、六角率人凡四千人許出張、安富筑後守向之、合力勢、武衛以織田大和守敏定爲大將、赤松以浦上美作守則宗爲大將、武田以逸見彈正爲大將、三家衆合千人許有之云々、傳説云、九里兩人討取之云々、不知其實、去廿九日大合戦有之、浦作高名無比類、織田同心合戦、敵勢四千人許有之、織、浦、兩勢、

纔七八百許有之、逸見彈正者、取上山、上見物迄云々、頸五十餘取之、識其名字者十二、以九里左馬允爲上首、不知其名字者四十餘人、其他都三百人許有之、安富方手、安富修理亮三上與三郎討死、浦作方手、負數輩有之云々、

三日、去月廿九日、於江州討死、敵方頸注文、自總持庵召寄之、三井兄弟、目賀多、小倉彈正、高野瀬、小川、山崎、梁瀬兄弟、九里名字者三人、安富兩人、山村之城、大墓以上十五人、此外二百餘人切捨云々、自堀出雲守、以使者云、江州之合戦、浦作手、好頸多取之、當方高名也、定可爲祝着間、白之、予面謝、丁寧遣、秀才於杉江陣取別、大上原方遣一行、賀赤松公着陣、又廿九日合戦高名事、且示藤左不例事、

播磨國明石郡山田村織田保藏氏文書

今度江州築瀬川原合戦時、敵數多討捕、頸到來、尤忠節被感思食候、殊被官人被疵之由、注進不惑候、一段可令褒美候、仍太刀一腰遣之候也、

卯月三日

花

押……足利義種

織田與十郎殿



第三節 永源寺京軍の兵燹に灰燼す附再建

築瀬合戦より約半年を経て猶京軍と近江軍の對抗は繼續したり。九月(明應元年)甲賀山中に在りし佐々木高頼は江北の京極氏と通じ江南軍は甲賀郡に京極軍は八風峠の西口なる高野山上に軍を張りて京軍に抗す。將軍は軍を分ちて二とし一を甲賀谷に備へ主力を蒲生の市原より進めて山上高野に迫る。之を甲賀入り、畑入りと稱したり。畑入りとは政所六ヶ畑蒲生の甲津畑等をいふなり。十五日赤松政則は野洲の立入より、浦上則宗は蒲生の桐原より東北に進み、芝原玉緒を経て甲津畑に陣し、織田敏定、武田元信等は山上に進みて京極軍と戦ひ之を敗り、蒲生郡志 卷九 參照勢に乗じて高野永源寺に火を放つ。一山堂塔灰燼す。永源寺は佐々木氏の建る所なるを以てなり。此の擾亂に驚きし百濟寺にては金剛輪寺へ弓矢の合力を請ひて萬一に備へたりと見え下用帳の一節に

一升廿五日百濟寺より弓矢合力事ニ來者酒、  
一斗五升廿七日百濟寺弓矢合力時、兵糧米、

等あり。是より先き永源寺は僧柏舟により文明十八九年に互り僧堂庫裏以下を改

建したればこの兵火に焼失せし建物は僅かに六年目なりき。大乘院寺社雜事記明應元年九月二十二日の條に

江州百濟寺進發、悉以燒拂之云々、毎事御威勢珍重云々、彌五郎今日自坂本參申、  
とあり百濟寺は永源寺の誤りにて二十二日其報を坂本より奈良に行きし彌五郎に  
より記したる文なれば永源寺焼亡は十七八日頃の事なるべし。

此時の永源寺住持は功林宗勳といひ既に文明八年當寺に董したる人なるも今此の大事に際し老齡を辭せずして再住したり。此れ後土御門天皇の綸旨を奉ずるなり、(寺院志、永源寺參照)漆桶萬里僧堂化緣疏を選し景徐周麟も幹緣疏を作りて資財の勸誘に便し永源寺を圍繞する永安、興源、曹源、退藏四ヶ寺の僧衆は功林を助けて興復に奔走し方丈佛殿衆寮等を建築しやがて僧堂をも成就したり。是れ蓋し國守佐々木高頼が近江國中の奉公將士に勸進すべきを令し大にその再建を援助したるによれり。奉書左の如し。

永源寺文書

爲當寺御再興、國中奉公衆、並在々所々勸進事、可致奉加之通、可被仰之由也、仍執達如件、



明應四年四月五日

久重 信花押 健花押

永源寺納所禪師

又漆桶萬里の僧堂化縁疏一章は能く其事蹟を明にす原本當寺に存す。又景徐周麟の幹縁疏は其著翰林胡蘆集中に見ゆれば共に全文を左記す寫眞 參照

僧堂化縁疏曰

近江州愛智郡瑞石山永源寺僧堂化縁疏並序勸進沙門王麟再拜敬白、  
本寺開山勅諡圓應禪師寂室大和尚受佛燈國師之正脈南遊扣中峰古林靈石諸明眼之門遂歸朝道價達聖聰嗚呼山中之禮樂並清規四海禪徒之所渴仰相傳僉卷舌江州刺史雪江居士歸依猷地令卓錫山曰飯高後改瑞石蓋有石瑞之異也山門號重雲祖塔額含空有傳衣四枚之法窟其院曰永安曰曹源曰興源曰退藏猶如雲門派下出四哲癡絕室中得四碩德亦復羅什有四依之菩薩也可謂盛矣明應壬子國之三軍互峰起寺係兵厄殿堂悉付芭蕉之一觀因循而至今矣傳衣四院之苾芻各或方丈或佛殿曹源退藏永安之徒營辨焉斧斤之響穿九宵而三基巍然千山中興源之一派先經營衆寮今乃建立僧堂就大小有力無力諸檀度求傾囊橐所希万方之施者福海壽山各攀等妙之花祝

此江州愛智郡瑞石山永源寺僧堂化縁疏并序勸進兼門王麟再拜敬白  
本寺開山勅諡圓應禪師寂室大和尚受佛燈明師之正脈南遊扣中峰古林靈石諸明眼之門遂皈朝道價達聖聰嗚呼山中之禮樂並清規四海禪徒之所渴仰相傳僉卷舌江州刺史雪江居士歸依猷地令卓錫山曰飯高後改瑞石蓋有石瑞之異也山門號重雲祖塔額含空有傳衣四枚之法窟其院曰永安曰曹源曰興源曰退藏猶如雲門派下出四哲癡絕室中得四碩德亦復羅什有四依之菩薩也可謂盛矣明應壬子國之三軍互峰起寺係兵厄殿堂悉付芭蕉之一觀因循而至今矣傳衣四院之苾芻各或方丈或佛殿曹源退藏永安之徒營辨焉斧斤之響穿九宵而三基巍然千山中興源之一派先經營衆寮今乃建立僧堂就大小有力無力諸檀度求傾囊橐所希万方之施者福海壽山各攀等妙之花祝  
法門廣大重雲 重雲石瑞高 祖塔在廟含空 含空石難削 且所以蘭若三軍之爭明也若 憲為令檀度也一新之結縁也哉 境致殊奇 經言改觀 才重木萬箇竹 爪垂竹取材 三本格七尺竿 摩前整盡力 控秦裝柳寄意 拾葉葉止啼 證疏 抄花聖蓋漆桶萬里

漆桶萬里和尚永源寺僧堂化縁疏



祝厥詞曰、法門廣大重雲、重雲而彌高、祖塔莊嚴含空、含空而難測、且所以蘭若繫三軍之爭國也者

寔爲令檀度企一新之結緣乎哉、境致鍾奇、經營改觀、千章木、方箇竹、非無所取材、三條椽七尺單、屢有時盡力、撫素琴聊寄意、拾黃葉要止啼、謹疏、梅花無盡藏、漆桶萬里、

翰林胡蘆集

江州瑞石山永源禪寺幹緣疏 並序

本寺開山、勅謚圓應禪師寂室大和尚、蚤入佛燈帝師室、機緣相契後、遊大元、親灸中峰本公暨扣元叟古林靈石之門、已而歸國、志在靜退、延文中江州刺史雪江居士嚮其道風、獻地居焉、所謂雷溪是也、山之壁立於後者曰飯山、民家之櫛比於前者曰高野、師觀其幽邃、輒卓錫而止之、蓋雖風穴之白丁、藥山之牛欄、常公之大梅、不可以加焉、然後山下父老子來助役、漸成梵刹、號曰永源、山曰飯高、後更名瑞石、以有石之異也、於是望重于帝里、貞治帝親染宸翰、以問法要、下詔住持、天龍確乎不起、又東人以建長來聘、皆斥之、世壽七八歲、示滅、舍空之院、號塔曰大寂、實貞治丁未九月一日也、邈而數之、百廿八年于茲矣、其上首某々、分成四派、各建塔院、附庸于本寺、永安、曹源、興源、退藏是也、楹檐翬飛於白雲青



嶂之間、一方勝槩也。明應壬子、官軍有事于江、而寺嬰兵燬成盡矣。諸徒相議曰、興復之役、不容緩、欲重建方丈、僧堂、佛殿、廊廡、山門、厨庫、塔院、衆寮、而所費不貲、非衆緣所募、則未易成就。謹持疏、徧告王公貴人、長者、居士、同道、知識、伏望樂施、所獲勝報、專祝邦家安全、次爲庶民祈福者。

溪山第一、詩中有畫、々中有詩、劫火大千、欲界無禪、々界無欲、茲羅國家焚蕩、其奈佛法下衰、初彼宏基、係于祖道、傳證、白日有承、一國之師、結屋青山、不蹈九重之土、掃地兮粒米莖菜、趨門者、破笠瘦藤、錦藍卽固、法身重提、舊話松石、皆大寂氣象、往拜遺塵、焦土今幾、楚人荒城、豈餘魯殿、還舊觀於廬岳、要見五百菴之插雲霞、徵故事於海陵、所願千萬之飛風雨、塵々甄叔迦寶念々、大心檀那。

第四節 山内就綱永源寺領田上庄を押領す幕府

命じて之を返付せしむ

佐々木六角氏の族山内小三郎就綱は高頼の軍を敗りし後、栗太郡田上牧庄内に在る高野永源寺領芝原の所務を兵糧料と稱して押領す。幕府は仁木左京太夫に命じて之を制止せしむ。

高野村永源寺文書

近江國山上永源寺領同國栗太郡田上牧庄内芝原當所務事、號兵糧料、佐々木小三郎押領云々、太不可然、所詮不日合力寺家雜掌、可被全所務之由、被仰者也、仍執達如件、  
明應三年十二月五日

春 貞花押  
元 行花押  
清 房花押

仁木左京太夫殿

同上文書

近江國栗太郡田上牧庄芝原當所務事、號兵糧料、佐々木小三郎押領云々、太無謂早退、彼妨、可被全領、知由、被仰者也、仍執達如件、

明應三  
十二月三日  
春 貞花押  
元 行花押  
清 房花押

山上永源寺雜掌



第五節

後土御門天皇永源寺再興につき住持に黄衣を勅許し給ふ

一山再興就りて明應四年九月後土御門天皇は永源寺住持に鎌倉圓覺寺の上位たるべき勅許ありたり。鎌倉五山は黄衣を着す即ち永源寺にも同色の法衣を許されたるなり。

永源寺文書

爲當寺再興可執務者舊之内被聞食訖轉位輩可爲圓覺寺上者  
天氣如此仍執達如件

明應四年九月廿六日

右中辨守光 花押

永源寺住持

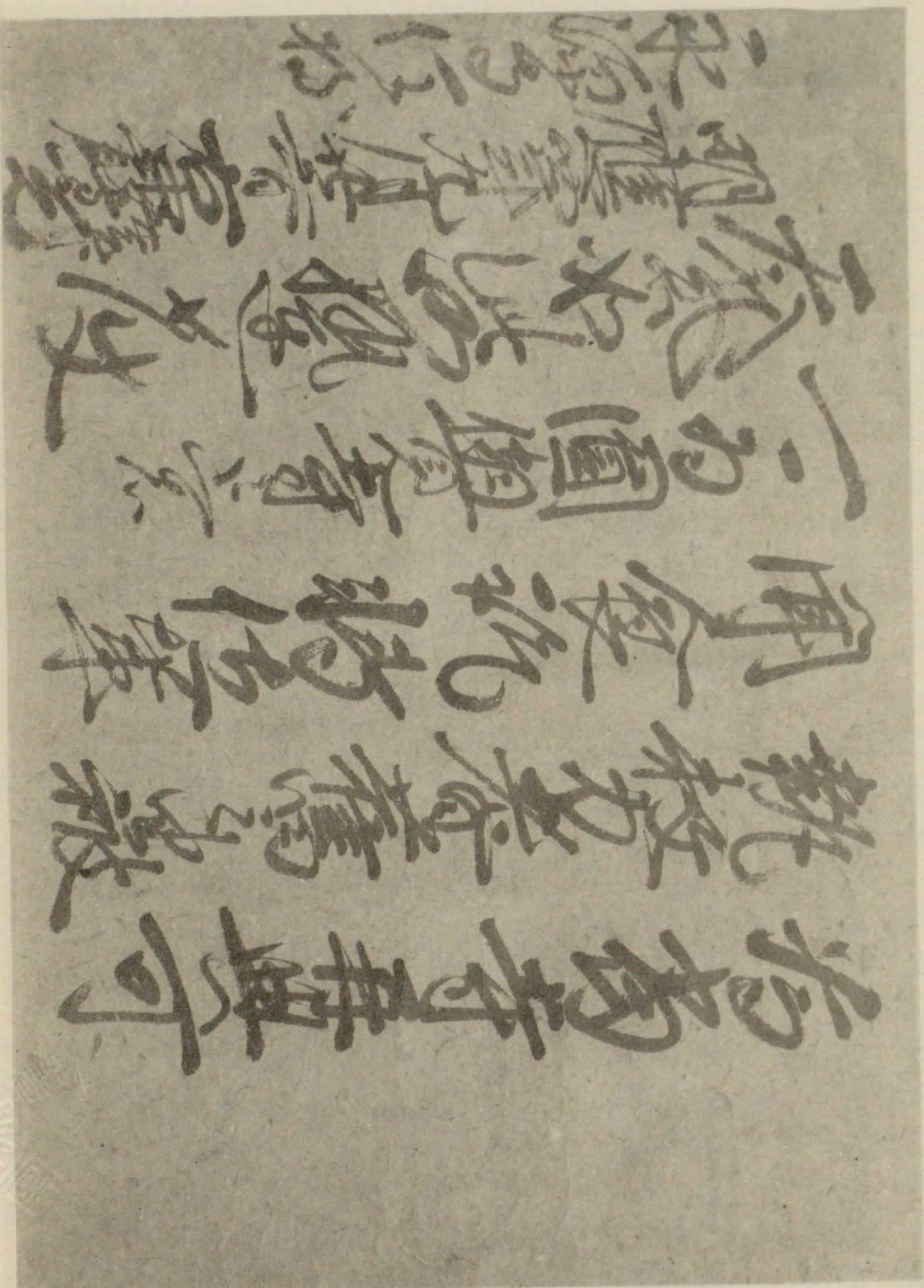
此の繪旨を奉戴せしは功林宗勳の時なりき。

第三十章

京極高濂智家領安孫子庄を平

田某に知行せしむ

安孫子庄は今秦川村の大字に安孫子存す古へは廣き庄名なり。同庄内には佐々



旨繪の興再寺源永皇天門御土後  
藏所寺源永



木京極氏の支流鞍智氏の所領あり。明應四年京極高濑其地を押收して平田某に知行せしめたり。按するに鞍智氏が京極材宗に黨せし爲めに高濑之を押收して己れの部下に屬せる平田某犬上武士歟に與へたるものならん。金剛輪寺下倉米錢下用帳に

明應四年十月

□升廿二日平田殿安孫子へ可入部由云々間、彼是如談合富永殿へ樽持御出時、臨時食、五合同日京極殿より安孫子年貢鞍智御前御押にて、其外諸給人前をハ可□御□内ニ使者上下五人御上時酒、

□升同日鞍智殿より當郷諸年貢何方へも辨者可爲ニ重成由、申來使者兩人酒、

□升廿三日當郷相論間、寺家むきの年貢無煩様にとて公文所へ樽持行人夫食、以上の記事によりて京極高濑より鞍智氏の知行を押へて平田某に與へしこと。又鞍智氏よりは若し當方知行の年貢米を他に渡すも當方へは更に之を取るにより二重支出となれば他へ出すべからざるを觸來り、安孫子郷の相論混亂したり依て寺よりは寺家向の年貢は煩無く收納さるゝ様に公文所へ使者を遣したる等の記事なり。かくて其後の記事を見るに左の二條あり。

二斗八升十二月二十五日 平田殿安孫子郷知行付て禮樽代、



一升三十日中務少輔殿、安孫子御成敗ニ付、寺家へ御成敗之奉行錢持行食、  
ごありいよ、鞍智氏の舊領地を平田某が知行することになり、寺より平田殿に祝  
の禮と寺家よりの奉行錢とを贈りしを記せり。主將の盛衰により部下將士の所領  
に押收の行はるゝは恰も政黨内閣の交替により地方官の任免行はるゝに似たり。

### 第三十一章 細川政元百濟寺妙城院が八朔 の禮物を贈るに答ふ

細川政元は右京太夫勝元の子なり。某年百濟寺々中妙城院より八朔の禮として  
卷數と香水一樽とを贈りたれば一日付にて左の答狀を交附したり。政元が足利幕  
府の管領たりし時のものなるべし。されば政元の管領は文明十八九年と明應三年  
より同八年迄なるが此文書は明應年間のものなるべし。

同寺文書寫

爲八朔之祝儀、卷數并香水樽一荷給候、目出度賞翫之至候、恐々謹言

八月一日

政 元花押

百濟寺妙城院

### 第三十二章 明應五年江濃連絡の兵事と佐 々木京極氏の同族戰

明應四年美濃の守護土岐家に繼嗣爭論起り、重臣等黨を樹て、對抗す。其詳細は  
船田後記に見ゆるも概要を記すれば、成頼の嫡子政房を奉ずる齋藤利國は、援を尾張  
の織田兵庫助近江の京極高濂、井亮政越前の朝倉貞景に請ひ、四子元頼を奉ずる石  
丸利光一派は、尾張の織田敏定と近江の六角定頼に援を請へり。されば我近江武士  
は江南の六角氏と江北の京極氏と對陣することとなりしが、更に京極氏に於ては中  
務少輔高濂と大膳太夫政高並に其子治部少輔材宗と反對行爲に出で、政高父子は江  
南の定頼と行動を共にせり。故に美濃國の抗爭は近江にも同じ波紋を畫きて、江南  
江北の對戰行爲となれり。當時京極高濂は本城を坂田郡上平<sup>春照村</sup>に置き、政高と材  
宗は愛智犬上の山中に根據を置き、即ち政高は犬上の桃原谷<sup>井谷村</sup>に材宗は當郡  
政所谷の黄和田に置き、常に定頼の重臣伊庭出羽守貞隆と氣脈を通じたり。元來犬  
上愛智は京極氏の勢力範圍に屬せし地なるに、分黨の爲に郡内武士は南方勢力に屬  
するもの多く、兩郡内の旗色は紅白混交を呈するに至れり。京極氏の忠臣たりし多



賀高忠の息新左衛門經忠すら政高に招かれて桃原の營に參したるに徴するも反高清黨の勢力漸大を證す。故に土岐氏の繼嗣問題は近江の地にも大なる波動を與へ死傷の腥風吹くのみならず兵糧軍資金以下軍需品軍夫さては陣見舞等經濟上にも大打撃を與へられたり。それ等に係る史料は斷片のものゝみなれども以下節を立てて記することゝせん。

### 第一節 土岐氏近江に來りて六角氏に憑る

明應五年の春未だ寒き頃美濃の土岐元頼は石丸利光と共に近江に來りて六角定頼に憑れり。定頼は元頼等を何れに居らしめしや分明ならざれども伊庭出羽守貞隆之を庇護したり。金剛輪寺下倉米錢下用帳の中に、

□ 升 二月十一日 就土岐九郎殿御出伊庭殿より樽貳荷所望折紙持來中間飯酒

五斗六升二十日同樽貳荷代

二 升 同日同樽持行人夫食下

の記事あり。定頼の重臣伊庭貞隆より二月十一日金剛輪寺へ土岐氏の來寓を告げて陣見舞に酒樽二荷を送られたきを注文したるに對し寺よりは二十日の日に二荷

の代米五斗六升を支拂ひしことゝ、その酒樽を送りし人夫賃に二升を支出せしを記す。一荷一升の送り賃なれば寺よりはあまり遠き所にもあらざるを知る。

### 第二節 京極政高の根據は犬上郡の桃原城

京極大膳太夫政高の根據は犬上郡桃原城に在り。桃原は芹谷村大字桃原にて四方山を周らす溪村なり。此地多賀より溪間に入りて今は頗る不便の地なれども昔時は北伊勢及び美濃國時村多羅村に越ゆる間道に當り戰時の行軍平時の商人等交通頻繁たりし所なり。慶長五年九月關ヶ原戰に敗れし西軍の將島津義弘が敵中に走りて西退せしは此間道なり。かゝる交通ある故に京極政高が戰時に根據を此地に置きし所以も解すべし。桃原城は桃原の南方阿彌陀峰に在り大字杉より保月に通ずる交通を扼し城頭の眺望廣し、城趾の南方は高一丈數尺の築堤を廻らす。數町の長きに互り當年守備の嚴なるを追懷すべし。政經此城中に在り明應四年秋戰備を爲さんとし、愛智犬上の將士を招き十月一旦池寺西明寺に陣を移し池寺と桃原城間に入出入す。十二月池寺に火災起る敵の放火にや、多賀新左衛門經忠は始め高清の重臣たりしも政經の招に應じて桃原城に入り兵糧軍資の調達に奔走したり。左記



金剛輪寺下倉米錢下用帳を通讀すれば此の間の消息自ら明なり。

明應四年十月

□ 升 廿八日 京極(政經)大夫御中間五人、力者池寺在陣仕間、辛勞ニて惣中間衆より

酒手迄ニ上下七人來時飯料、

七 升 (代) 同酒直

二 升 十二月廿四日 (多賀經忠) 新左衛門殿より兵糧米懸ニ折帋持來、若黨酒

一 升 同事ニ使節、桃原へ御出候間、追懸狀持行、臨時食、

二斗八升 出羽殿歳暮禮楹代(伊庭出羽守貞隆)

一斗六升 同時ニ並木方へ樽代(伊庭の臣)

一斗四升 新左衛門殿兵糧米爲<sub>二</sub>佗事、高橋兵庫方へ樽代、

一 升 廿七日 池寺火事無<sub>二</sub>心元<sub>一</sub>とて使者遣、禮狀持來時酒、

四 升 新左衛門殿兵糧米事□井又次郎上時飯酒、

一 升 同事爲<sub>二</sub>佗事、小八木方へ高橋方の狀持來者酒、

一 升 廿八日 同事ニ年行事、桃原へ御越時臨時食下、

五 合 廿九日 小八木方返事、御要脚錢持行食、

一斗四升 五年正月 新左衛門殿兵糧米落居ニ付て、高橋兵庫方へ禮錢樽代、

一 升 同樽持行食、桃原へ

二斗七升 京極(政經)大夫殿年始御禮樽代

一斗六升 同時又<sub>二</sub>六方<sub>一</sub>へ様代(政經の臣)

一 升 樽持行食二人分

四 升 出羽殿中間、年始禮來飯酒二人

### 第三節 京極材宗政所の黄和田城に新年を迎ふ

明應五年京極治部少輔材宗は政所谷の黄和田城に新年を迎へたり。黄和田は其頃黄蘗きわだと書せし所にして材宗は其根據地をこゝに置きたり。前章に記せり明應五年金剛輪寺下倉米錢下用帳に、

二斗八升 二月十一日 京極治部少輔殿年始御禮樽代、

一斗六升 市村殿樽代、

六 升 同政所谷迄、樽持行人夫食、

の三行ありて年始の禮物を二月十一日政所谷の材宗と家老格の市村殿とに贈りた



る時の支拂帳なり。市村殿は四郎兵衛尉が材宗に供奉せしことを知る。長享二年材宗は當郡松尾に於て高濑と戦ひ敗れて黄和田城に入りしこと前章に記せり。之によりて材宗の根拠が政所谷に在りしを證す。黄和田村は八風峠を越して伊勢に通ずる間道の要地にして戰略上より逸す可からざる所なり。小字城の腰の地名尊重すべし。

### 第四節 伊庭貞隆島川城に出陣す

春來戰備を修して土岐元頼を援け併せて京極高濑を討せんとの計畫は着々進捗したれば五月の初め六角定頼の代將伊庭出羽守貞隆は陣を當郡島川に移し士氣を鼓舞して美濃進軍の帥を集めたり。島川城は八木莊村島川に在り八木莊小學校の附近南殿城といひ村北に北城あり。防備の完北城に在れば伊庭氏の入城は北城なるべし。貞隆が島川に出陣するや附近の大寺大社等よりは出陣見舞の禮物を贈りて之を犒へり。左記金剛輪寺下倉米錢下用帳を一讀すれば諸將の出陣につき兵糧米の徵發、出陣の慰問等寺僧等が如何に忙殺されしかを知るに足る。

六 升 目賀田殿、中間年始禮登時、飯酒、

一 升 四月十六日 (又次郎高夏) 鞍智殿より兵糧米御懸時、若衆原御登之時酒、

五 合 十六日 同事返事折昏、持行食、

二 升 廿五日 鞍智殿借米事ニ重て與次郎方被登時、飯酒、

五 升 五月七日 出羽殿出陣、鞍智殿借米、彼是談合衆食酒、

一 升 出羽殿嶋川へ出陣付て樽持行食、

八 升 八日 出羽殿中間、力者、厩者、嶋川陣より酒所望ニ來時、飯酒、

□ 升 九日 治部少輔殿御出陣、禮樽持行人夫食、

市村殿同所へ

五 合 (掃部助) 富永殿御出陣間禮樽持行食、

五 合 多賀新左衛門殿陣中無音之間、

五 升 廿八日 治部少輔殿御中間、ちうげんこもの小者御出張間、禮錢可取とて來時、飯酒料五人

分、

五 升 同酒

一 斗 廿九日 次日同少輔殿雜色、力者、厩者御出張、禮物取來時ノ飯酒、

一 斗 三十日 (政經) 太夫殿御中間、三郎四郎與五郎上下五人御出張目出度間、酒手事



申來候へ共飯酒迄ニ歸ル

- 一 斗同 日平田殿出張、禮樽持行人夫食
- 四 升同 日高橋民部少輔殿より兵糧米懸ニ來殿原、中間飯酒

### 第五節 佐々木軍の美濃出陣、土岐元頼の敗死

伊庭貞隆島川に陣して總軍の軍事計畫をせし以前元頼を奉ずる一隊は政所谷より八風峠を越え伊勢を経て美濃に歸り五月十日城田城に入りて守備を嚴にせり。伊庭貞隆江南の諸將を率ゐて犬上の五僧越と八風峠越二道より進み城田附近に陣す。江北の京極高濤は上平城彌高山に在り淺井亮政三田村某を派して利國を援く。亮政等長良に陣す。十四日利國兵を率ゐて進出し戰備を修む。十七日尾張の織田兵庫助等來り二十三日越前の朝倉貞景の援兵も來着し江濃尾越の將士美濃平野に充滿す。かくて戰機熟し二十七日利國軍は四方より城田城を攻む。城兵能く戰ひ利國軍を敗る。二十九日利國は總軍を指揮して敵兵を攻め諸軍血戰城終に陥り利光父子戰死し元頼も自盡したり。六月一日朝倉氏の援兵凱旋し三日淺井三田村等も凱旋す。

### 第六節 政高並に材宗歸陣して金剛輪寺及び吉田城に入る

土岐元頼の城田城慘敗に折角の援軍も功なくして匆々として佐々木軍は歸陣したり。船田後記によれば歸路不破口にて高濤軍の爲に大打撃を受けしやに見ゆるも是は七月十一日の敗戦と混同したるやに見ゆ。佐々木軍が美濃に於ける戰況は傳はるものなし。只金剛輪寺の下倉帳によりて京極材宗は歸陣後一旦金剛輪寺に隠れ暫くにして吉田氏の吉田城に寓したると。伊庭貞隆も無事に歸陣したるを知る。即ち下用帳に、

- 六 升 六月二日 治部少輔殿當寺ニ可有御座風聞間、佗事談合衆、會食
- 二 升 十日 爲御屋形、新左衛門殿より疊十帖懸來、中間酒飯料
- 五 合同 日同事ニ佗事狀、持行食
- 升 十七日 新左衛門殿、治部少輔殿、御參間、又禮ニ樽持行、
- 十一日 出羽殿歸陣禮、楯持行食、
- 六 升 廿二日 治部少輔殿、吉田御座間、徒然由、御中間衆三人、酒所望登時飯酒、
- 一 升 五合 治部少輔殿、御力者、厩者、酒所望ニ登間飯酒、



以上列記中に治部少輔當時ニ可有御座風聞にて佗事に行くといひ、又吉田御座間徒然により酒の無心に來るあり。歸陣早々は寺に宿しやがて吉田城に移りて無聊の餘り酒の無心に使者を遣はしたるなり。十一日には伊庭出羽守の寓所に歸陣の禮物を送る等歴々として見るが如し。

### 第七節 金剛輪寺京極高濤に戰勝の禮を贈る

出陣に對しては兵糧米、軍資金、出陣見舞等に忙殺されし寺僧も戰終りて將士歸陣すれば勝敗の別なく又歸陣の禮を贈りて一寺の安泰を欲したり。其の中にも勝者への禮は亦迅速を尊ぶものなり美濃の戰況南軍に非なりと聞く金剛輪寺僧は六月一日に早く高濤へ北郡靜謐と稱して禮物を送るべき路次の事を問ひ、十五日には遠く使者を上平城に遣はして酒樽の禮物を贈りて勝戰を賀したり。古へ戰時に寺院は局外中立なりしも常に武將の怒に觸れざらん<sup>ニ</sup>苦心せし狀は歴々として見ゆ。

#### 金剛輪寺下倉米錢下用帳

- 一 升 六月一日 中務少輔殿へ北郡靜謐御禮可出路次體尋ニ、小野太郎左衛門殿ニ侍從狀行人夫食、

- 二 升 十五日 就北郡靜謐中書方へ御禮樽持行人夫食、

### 第八節 伊庭貞隆の上平城攻撃と高野瀨氏等の戰死

五月末に美濃に敗れて歸陣したる伊庭貞隆は一ヶ月を休養し七月に入りて京極材宗の爲に兵を出して京極高濤を上平城に攻む。金剛輪寺下用帳に、

- 四 升 七月一日 出羽殿中間、夏御陣間、酒手所望、來時飯酒、

とあり。七月一日出陣の爲に酒の無心に來りしをいふ。上平城は坂田郡伊吹の前峰彌高山の一角に在り彌高寺百坊跡の東尾なるを以て彌高寺の城ともいへり。東麓に上平寺あり<sup>春照村</sup>住館の地なり上平館といふ趾猶存す。貞隆は當郡及江南の諸將を率ゐて北進し十一日大清水山<sup>春照村</sup>に陣す。高濤令を傳へ兵を集め城を出て、貞隆の陣を突く攻勢三千と稱す。兩軍接戰貞隆の軍敗れ退却す高濤の兵北ぐるを追撃すること數里、醒井、番場を経て磨針嶺までに及ぶ、其間南軍の死傷頗る多し。船田後記の傳ふる所によれば伊庭周防前司を始め下笠氏、青地氏、高野瀨氏、種村氏、九里氏、小河氏、山脇氏、井關氏、山田氏、田村氏、等陣歿するもの五百餘人と見ゆ。今井清遠の軍功記には南軍を長驅して數多の將士を斬殺せしを詳記す。此の軍功記は簡にし



て要を得たる文章にして此合戦に係る記事のみならず多賀經忠が始め高深黨たりしに後に材宗に屬せしこと、並に經忠が桃原に在りしこと等をも明にし前記金剛輪寺の下用帳の記事と吻合するは愉快なる所とす。全文左の如し。

今井軍功記

清遠 左衛門尉  
法名長西

明應五年六月治部少輔殿御出陣とき、中務少輔殿彌高寺にまします御時、多賀新左衛門尉經忠に一陣仕桃原に在陣すと雖も、經忠治部少輔殿へ參らるゝ間、清遠一身引切彌高寺の御陣へ馳參り、同七月十一日伊庭出羽守、大清水山に陣取、清遠人衆在所返遣、南道路を取切、毎日數多敵を討取り、出羽守退散の時追懸、醒井、番場、磨針におゐて合戦いたし、隨分の頸四十餘討取、一身高名由御感狀在之。

第九節 齋藤利國の近江來寇と六角高賴京極材宗等の應戰

五月には美濃戰に敗れ七月には上平城攻撃に敗れし六角高賴は其後更に戰鬪準備を爲し京極高深及び齋藤利國に報はんとして八月より國中の武士に其意を通じ戰備を爲さしむ。朽木文書高深又其狀を聞知し檄を美濃に送りて利國に報す連戰連勝の

得意時代に在る利國は着々戰備を爲し九月には近江に侵入せんとする形勢聞へたり。金剛輪寺の下用帳に

- 五 合 九月六日 京極殿人夫事ニ池寺へ狀持行食
- 五 合 同日 日敵出張ニ付て大夫殿へ御禮樽持行食

とあるは敵軍來寇につき京極政高へ見舞の禮を贈りたるを、當時政高が池寺に在りしを知るべき記録なり。然れども利國の來寇は遅れて十一月に至り大舉近江に入り連戰連勝して南進し六角氏の觀音寺城下を越えて蒲生郡に亂入し各所の村落を放火し傍若無人の狼藉を爲し、高賴軍は全敗して和を請ひ和就りて歸國せんとせし時高賴の軍不意を討ち利國主從算を亂して死す。蒲生郡志卷九參照利國の陣歿は京極高深に不利を來し春來の戰勝も其功無く十二月七日高深は上平館を出で、高島郡海津に遁れ四ヶ年を其寓に送ることゝなれり。江北記されば此間京極材宗は得意の時代となれり。永源寺の瑞石歴代雜記明應六年四月廿三日の條に、

有レ施主、請レ合山、清衆、於レ小幡戰場、修ス水陸會、去歲、害レ邦軍族、冤讎、悉レ造ス立木塔、神崎郡とあるは翌年四月に永源寺一山の僧が施主に請のより去年の戰場小幡神崎郡に行きて木塔婆を建て、陣歿諸士の靈を弔ひしを記せしものなり。



第十節 武家の要脚錢。恒例錢。臨時米

糧食と軍資金は戦時に缺くべからざるは古今同じ。戦國時代對戦ある毎に米錢の徵發を大寺大社に強請されしは頗る迷惑を感せしならん。金剛輪寺が明應四年中の負擔を見るも戦時に於ける裏面の困狀を赤裸々に知るを得べし。京極政高の爲には多賀經忠より廿貫文錢の賦課あり。其他の武將よりも兵糧米の徵發ありしが更に南近江の六角家よりも又要脚錢を賦課徵收したり。それ等史料を抄出すれば左の各種を得たり。

明應四年

- 四 升十一月十九日六角殿御要脚折紙持來、中間一宿飯酒、
- 七 升同日同事、談合衆會、酒肴代、
- 一斗四升二十日六角殿御要脚佗事、並木方へ樽持行人足、
- 四 升 同樽持行人足、
- 一 升十二月一日六角殿要脚ニ本茂藤兵衛方へ狀持行人足、
- 升同日同事ニ並木方へ狀持行人足、

一 升三十日六角殿御要脚錢持行食、

以上の支拂帳により十一月十九日に要脚錢の賦課を受け一山の僧會を以て協議し翌日は伊庭貞隆の家士並木方まで佗事依頼に酒樽を持參して使僧を出し、十二月一日には更に同事につき本茂藤兵衛と並木方へ使者を遣はし其結果は十二月三十日に要脚錢を持行き納付したるを記す。佗事依頼により多少輕減はありたらんも全部の斷りは到底用ひられざりき。

以上六角氏の要脚錢なるが更に京極氏よりも要脚錢の請求ありしは、

- 升廿二日治部少輔殿より御要脚御懸之時、須河方來狀之時、酒同夕飯酒、十四貫文 多賀新左衛門殿要脚出ス、
- 五 合 同事、小八木方へ談合、年行事御出時、臨時食
- 二 升 恒例錢遣候人夫食、
- 二斗四升 恒例錢利分可取之由、種々被申候間、以中村殿理を申候間、樽壹荷、
- 一 升 同樽持行食
- 二斗八升 恒例錢利分之事、可取之由被申候て、請取、□□候間三上殿へ樽壹荷分、



- 一 升 同持行食
- 一斗二升 同事ニ谷彌太郎方へ樽一ツ
- 三 升 恆例錢不成候間、右ニ遣候承仕酒、
- 二斗四升 恆例錢利辨相果候間、中村殿へ樽一ツ、
- 卅六文 十二月廿八日ニ寺奉行より登城候へと被申之時、年事行使節兩  
三人罷上候時夕飲、
- 廿四文 恆例錢延引候様ニ申候て、在城時二人分夕飯、
- 三 文 三上殿恆例錢渡候、但谷藤七郎方へ渡申候、請取在之、
- 十六文 同渡之日使節上下兩度飯料、
- 三百文 臨時米之儀ニ鈴村甚五郎方ニ禮書、
- 百 文 同能登右馬允、小者共出之、
- 二百文 臨時米之事西座申通、御穿鑿可在之由、三上殿被仰候時遣候、樽壹  
荷之代、
- 百 文 同肴の代、

### 第三十三章 京極材宗等弓矢楯板を金剛輪寺に借る

南北朝時代の山城なるものは多く山上の寺院を利用したりといへば大寺に軍需品の設備はあり得べき事なるも應仁戦以後城廓の特立せし後も大寺には弓矢や楯板矢毘立等を貯へて萬一の自衛に備へたり。金剛輪寺の下倉米錢下用帳中に同寺へ楯や弓矢の貸與を請ひに來りしもの散見す。又楯用の「さん木」の所望に來るもあり。梵王の宮にも殺人の器具を貯へたる亦時世の罪と謂ふ可し。

#### 金剛輪寺下倉米錢下用帳

- 斗 廿六日 百濟寺より弓矢合力事ニ來者酒
- 廿七日 百濟寺弓矢合力時、兵糧米、
- 十七日 藤堂九郎兵衛方、楯のさん木、所望間、持行人大二人食、
- 十八日 治部少輔殿より、楯さん木、御所望間、持行臨時食、
- 二 升 安孫子又六殿に「たて」を御借候て御返之時、若衆御出之間、酒上下  
貳人分、
- 二 斗 三上殿矢毘立の時、十人之飯酒、



- 一 升 矢毘立之事申候て遣候臨時食、
- 六 升 矢毘立事ニ談合衆會の酒、
- 二斗四升 谷方矢毘立之事申候て來候時樽遣候、
- 四 斗 矢毘立可來案内ニ十介方被成候飯酒、
- 二斗四升 矢毘立上下飯酒、
- 三 升 矢毘立時行臨時食、
- 五 合 矢毘持食、
- 三 升 同矢篋、觀音寺へ持行臨時食、
- 一 升 矢の立事ニ(武佐)むさへ書狀をわんじ食、
- 二斗四升 谷殿へ矢のたち之儀、並ニ人足之儀申候て遣時樽一荷之代(武佐の谷氏なり)
- 一 升 同樽持行わんじ食

第三十四章

後土御門天皇百濟寺燒失の奏狀により

繪旨を下して再建せしめ給ふ

百濟寺は角井村に在り明應七年八月九日本堂裏の建物より出火し折柄の強風に火は忽ち四方に飛散し方七間の本堂を始めとし五重塔婆、常行三昧堂、阿彌陀堂、太子殿、二階堂、大聖院、五大力堂、愛染堂、長徳院、三所神社、鐘樓、經藏、樓門、廻廊等延焼し、佛像什器文書記録等灰燼に歸し只本尊のみ燒失を免れたれども少損したり。學頭僧圓信以下一山の衆徒等狀を朝廷に奏し本尊修理の勅裁を奏請せり。十六日後土御門天皇繪旨を下し本尊の修理と本堂以下を再建すべきを仰せ出されたり。

宣秀卿記 明應七年

江洲百濟寺衆徒等。謹言上。

右當寺者勅願無双之靈地。佛法有緣之梵場也。然今月九日卯刻。風雨之時節猛火出現。本堂并常行三昧阿彌陀堂。太子殿。五重塔。一切經輪藏。其外諸堂悉回祿候訖。言語道斷次第也。不知火之由來。希代之天災歎而有餘乎。國中度々大亂。無此災。今不慮逢此難事。時刻到來歟。殊本堂本尊十一面觀音者聖德太子御作也。奉取出之處御指一損。告權作輒難奉修造。早蒙勅許可致其沙汰者也。仍衆徒等誠惶誠恐謹言。

明應七年八月 日

第三十四章 後土御門天皇百濟寺燒失の奏狀により繪旨を下して再建せしめ給ふ



當寺記録

(本紙者散書也)

あふみの百濟寺、この月九日雨風の時、本堂のうはの堂より火出して、本堂以下一ものこり候へすやけ候、なにも火の由來は存知候へぬよし申候、三百坊の在所にて候、坊舎へ一もやけ候ぬよし申候、本尊修造の勅裁を下され候へと、かやうに申候、御心ニ候て御披露し參らせ候かしく、

八月十六日

中御門

(宣)のふ秀

勾當内侍とのへ

繪旨

當寺諸堂悉焼失、所被驚思食也、本尊無爲尤以神妙、早奉補尊像之損、可專伽藍之再興者

天氣如此、悉之以狀、

明應七年八月十六日

左 中

辨花押…中御門宣秀

百濟寺衆徒中

第三十五章 伊庭貞隆百濟寺山林四至封境を安堵す

明應七年八月炎上の災ありて後僅かに六年を経たる文龜三年四月二日百濟寺は又兵火によりて焼亡したり。此の兵亂は佐々木高頼と其臣伊庭出羽守貞隆の争ひにて戰禍は近江南郡に多かりし。二度の火災に什寶古記を灰燼に委ねし同寺にては傳來の境内山林四至の古記録等を喪ひたれば永正元年狀を伊庭貞隆に訴へたり。貞隆は閏三月廿七日舊規による寺有山林四至を明記したる安堵狀を交付したり。左に其文書と永正十八年七月二日付進藤貞治三上頼安連署の八方搦の圖とを記し置く。

百濟寺文書

就今度當寺炎上之儀、支證等被引失上者、四至之事、東者限筒井峠、南者限豊國野、櫻木庭、西者限一水口、北者限石佛谷、任當知行旨、寺家御領地不可有相違、若違犯之族在之者、堅可被處嚴科者也、仍狀如件

永正元

閏三月廿七日

出 羽 守花押

百濟寺政所御房



百濟寺文書

巽 盤石 豐國野、櫻木庭、長尾、彌七垣内、坤

牛王 椿垣内

東 筒井峠 一堂 一水口。西

目連木庭 高橋辻

長雨明神 花尾 石佛谷 北 小黑見前川 乾

右八方搦

永正拾八年七月二日

(紙背裏判)

花 押……進藤山城守貞治  
花 押……三上越後守頼安

第三十六章

佐々木氏綱弟定頼と共に永源寺領を復歸す

栗太郡田上牧庄及び中庄には永源寺開山寂室禪師の遷化ありし頃より同寺領に寄附されし地あり。應仁文明の亂以後武家の爲に押領せられて幕府が幾回の制止

も其功無かりしが、永正十三年九月に至り佐々木近江守氏綱及び其弟にして禪僧たりし江月齋承龜還俗定頼は再び舊寺領地牧庄を寄進し溪橋や廊下の修理料に宛てしめたり。寄進狀左の如し。

永源寺文書

栗太郡田上牧庄之内、山上永源寺領之事、近年雖爲不知行、溪橋廊下爲修理料、重而令寄進、訖、向後知行不可有相違之狀、如件、

永正十三年九月廿六日

近江 守花押……(佐々木氏綱)

永源寺侍衣禪師

永源寺文書

栗太郡田上牧庄之内、山上當寺領之事、近年雖爲不知行、溪橋廊下爲修理料、重而自江州在寄進狀之旨、御知行不可有相違候狀、如件、

永正十三年九月廿六日

江月齋承龜花押……(佐々木定頼)

永源寺侍衣禪師

右同事につき兩人の寄進狀あるは裏面に重大なる意義を有す。近江守氏綱は六角家の主人公なれども生來の病者殊に足疾にして武將としての行動自由ならず。依



て京都相國寺に喝食となる弟江月齋承龜を還俗せしめ兄に代り近江守護職たらしめたり此の寺領の寄附狀は兄弟が守護職授受の際に於けるものにて承龜喝食は爾後彈正少弼定頼として佐々木六角氏の季世に家勢を舉げし英雄なり。此の一通は猶喝食の名を以て署したる珍らしき寄附狀とす。其翌日付にて蒲生郡の小口薬師二村内に在りし同寺領につき佐々木氏の臣進藤貞治等連署の狀あり。其狀によれば佐々木家の代替りに際し國內に賦課せらるゝ一代勘料錢を永源寺領には先例により免除したるを沙汰したるものにて佐々木定頼が佐々木宗家の主となる時の勘料賦課を立證する史料とす。同年十二月十七日付 同事に係る文書併記

永源寺文書

小口、薬師之内、山上永源寺領事、勘料申付族在之、云々、在々所々彼寺領之儀者、毎編諸役御免之儀候之條、其段可存知、尙以催促之儀、雖有之、曾不可有承引之由候也、仍執達如件

永正拾三年九月廿七日

兩所

名主沙汰人百姓中

永源寺文書

高貞

治花押  
城花押

小口之内、當寺領勘料事、自先々御免之通被成奉書之處、尙以催促之由、太無其謂之條、不可有承引之由候也、仍執達如件

永正十三年十二月十七日

山上

永源寺

賴貞

治花押  
安花押

第三十七章 佐々木定頼百濟寺に法華經を讀誦せしむ

近江の守護佐々木彈正少弼定頼は戰國時代に於ける文武兼備の驍將にて佐々木六角氏世代中末期に於ける英主たり。大永三年百濟寺雜記の下用帳中に、  
一斗一升 御屋形様より御詔ノ法華經讀誦ノ日中料圓宗へ入之、  
二斗三升 御屋形様ヨリ御詔ノ法華經日中料實相坊、  
一斗一升 御屋形御祈禱法華經讀誦時、日中料範意□  
等の記載ありて何れも御屋形定頼の爲に法華經を讀誦し祈禱を修したる時の中食料支拂を記す。按ずるに毎月一度百濟寺本尊前にて定頼の依頼により法華經を讀誦したるが如し。定頼の臣進藤山城守貞治へ同寺より使者を遣はせしことの頻々たる事も同記中に見ゆ。



### 第三十八章 百濟寺金剛力士像彫刻と大永三年の米價

大永三年百濟寺仁王門に安置する金剛力士の二像を造る。同年の記録下行帳に、

- 六 斗 二王造初ノ時祝ノ餅奉行衆ノ依衆議下、
- 三 斗 二王南ノ方一躰立ル時ノ祝東西奉行衆佛師□□鍛冶承仕加定、  
飯料下、卯月二日、
- 五斗六升 二王立ル時、間酒五十六人ニ一升宛、六月三日札、北谷福行ニ下、
- 三 斗 二王祝、日中料寛圓下、六月十四日
- 一 斗 二王祝時、日中料當座七人承仕經宮、
- 三石一斗五升 二王祝物、三百十五人一升宛下、
- 一石一斗二升 二王造佛師、後丁、東、五十六人二升宛下、
- 六石三斗 同上佛師、後丁、西、三百十五人二升宛下、(次項に入月廿一日とあり)
- 一 升 二王祝、日中料、六月十四日

右の記録によれば南の方一體は四月二日既に造立したれば大永三年の春より造佛は初められ終りは同年八月の條に佛師の手間賃を支拂あれば二軀の完成は八月な

りしを知る。

同年の米價は同帳に錢一貫文に米四俵五升之直段と注し、三十三石の代錢廿貫文云々と記せり。されば米一石の代錢は六百〇六文餘に相當す。

### 第三十九章 佐々木定頼高野瀨城に滞陣して淺井亮政に備ふ

大永五年七月佐々木定頼は淺井亮政を江北に征せんとし十八日を以て小谷城總攻撃を令したり。是れ亮政が定頼部下の伊庭氏九里氏等と連絡し定頼を苦しめんとせしによれり。定頼は南北に敵を受けたれば南は岡山<sup>蒲生</sup>北は小谷と高島の海津とに兵を集め各々之に當らしめ、己れは亮政の根據小谷を屠らんとせしなり。目賀田、高野瀨、山崎等、愛智武士も多數の郡人を率ゐて從軍す。朝倉宗滴記には、

大永五年四十九歳、江州北の郡大谷、七月十六日城責有之、  
と見え、十六日に既に定頼の軍は小谷城攻撃開始を記す。然れども城堅固にして容易に陥らず。八月の初めには南方の敵軍蒲生郡に活動し五日に第一戦は行はれ定頼は腹背敵の苦境に立てり。是に於て援を細川高國に請へり。二水記に



大永五年九月朔日、去曉八月廿九日細川被官人、江州合力諸勢出陣云々、中書京極高濑被官アサ  
イ城、此間六角少弼攻之、雖然、至于今城堅固也、結句國中一揆蜂起、仍六角及難儀之間  
近日度々合力勢出陣也云々、

と見ゆるは淺井勢の頑強と近江國內一揆の蜂起を云へり。かくて九月十八日には  
定頼の軍進んで小谷を攻め遂に亮政を破る。亮政奔りて美濃に入り齋藤氏に據れ  
り。是より先き越前の朝倉教景は亮政と定頼の和平を謀りしも談容易に就らざり  
しが亮政没落後は更に教景も美濃に行きて調停の勞を執れり。此間定頼は當郡高  
野瀬城に入りて滞陣し教景の調停就らずんば十月二日を期して更に出陣命令を部  
下の諸將に出さんとせり。其事情は左の一文書によりて證せらる。

朽木文書

濃州之儀ハ來月二日にて立衆書御進入、

今度者長々御在陣、御辛勞御大儀共候、御渡海之後、不申、非本意候、依爰許取亂罷過候、  
御屋形様御歸陣無相違事、公私大慶此事候、濃州之儀ニ于今中郡高野瀬城ニ御居陣  
候將又丹後物忿之儀仁付而從武田殿御合力之儀被仰候、然者御同名中の御廻文可  
然由、從武田殿御申候、然間相調進覽候、斯様ニ申上候て、惣別御出陣之儀者、有間敷候

間、可御心安候、是ハ内儀ニ申事候、一段可有御隱密候、先御出陣之體、御用意可然之由、  
御詫候、返々も御出陣之儀者、不可有御座候、内儀ニて堅隱密ニ被仰出候事候、可被成  
其御意得候、其段横山殿へも申入候、可有御内談候、可得御意候、恐惶謹言、

九月廿六日

貞

信花押：香庄源左衛門

朽木民部少輔殿

參人々御中

上書「香庄源左衛門尉貞信」とあり。

蒲生郡岡山と淺井郡小谷と南北に敵を有せし佐々木定頼は亮政を敗りし後は安  
全地帯たる當郡高野瀬城に入りて滞陣し敵狀を待ちしが教景の調停功を爲し亮政  
と和して觀音寺城に凱旋せり。高野瀬城は日枝村大字高野瀬の西に在り。平地の  
築城なり今大なる竹林地帯となり林中所々城壁と堀の形跡を存す。

第四十章 後奈良天皇永源寺住持に紫衣を勅許し給ふ

明應四年九月後土御門天皇永源寺住持に黄衣勅許ありしより三十四年を経て享  
祿元年十一月後奈良天皇は同寺を嵯峨天龍寺に准じ紫衣を勅許し給へり。



當時禪寺の僧位は京都五山、鎌倉五山、皆黄衣なりしが天龍寺は京都五山第一位とし  
て紫衣を許さる。但し南禪寺は濃紫ともいひ天龍寺は薄紫とも云へり。然るに今  
永源寺に紫衣の勅許ありしは甚しき特典と謂ふ可し。永源寺當住は四十六世明窓  
元慧禪師なり。蓋し此の勅許につきては三條西實隆落飾後稱道遙院  
堯空又聽雪子及び細川高國入道  
常桓の周旋ありしこと現存の添狀によりて證さる。

後奈良天皇繪旨

當寺事轉位輩可准天龍寺者

天氣如此仍執達如件

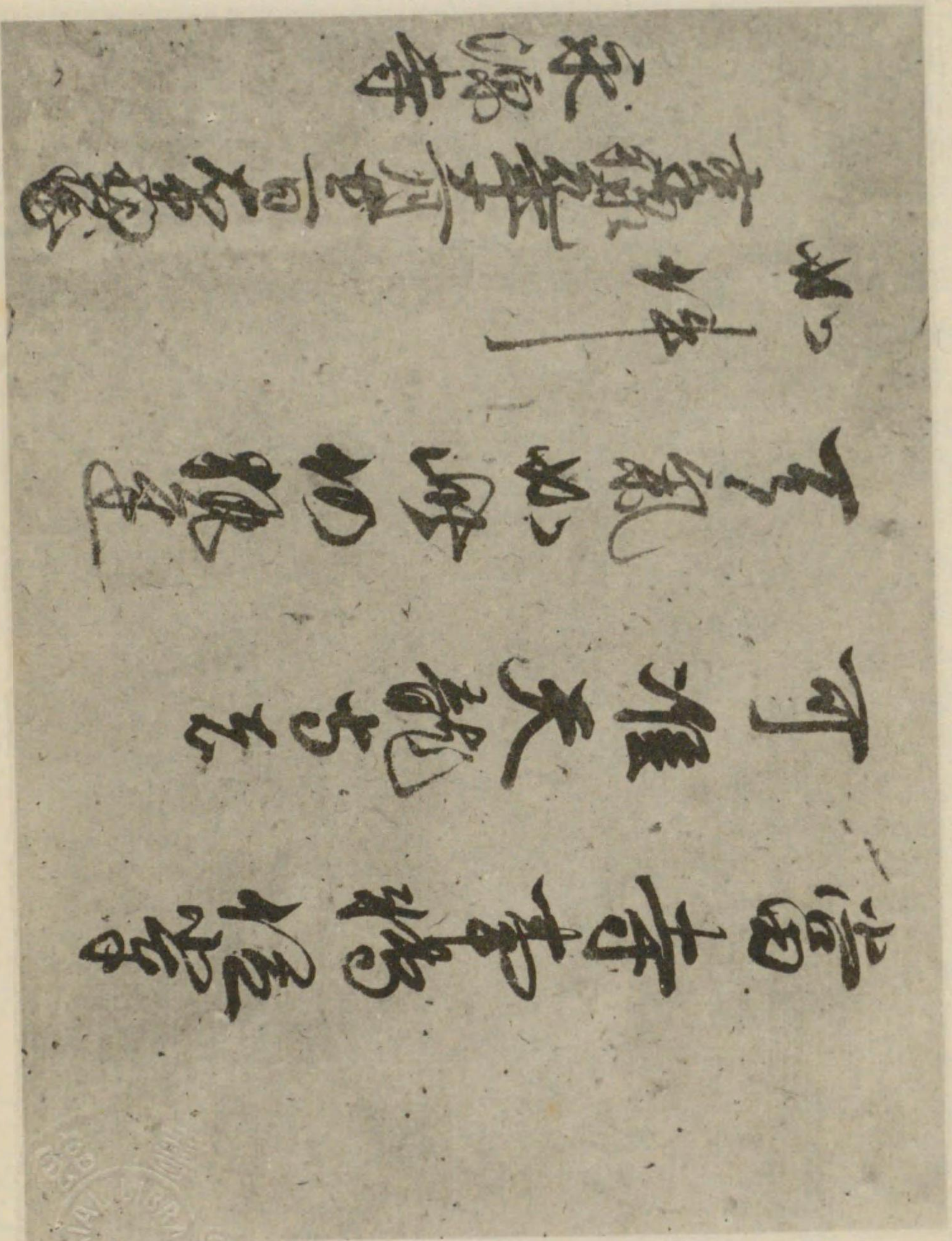
享祿元年十一月廿二日

永源寺

右中 將花押

永源寺文書

芳書忝薰讀本望候、伊州邊御移り、先以珍重候、早々被廻良策候之條專一事候、既當年  
無餘日候歟、至今日存命不可思議事候、於今術計事盡候、每事御名殘惜、今一度拜顔今  
生之思忘事存候、  
抑永源寺事、則伺申入候處、是者過分之儀候、可爲如何哉之由、再往疑慮候、雖然被執申



後奈良天皇繪旨  
藏所 永源寺



之子細難默止之間、勅許之由候、一段御眉目候、則仰頭中將、繪旨調達候、相違事候者、重而可承候、可堪候、右筆御免可被下候、前繪旨案者留置候、寶篋院殿御判案文、慥返申候也、

聽 雪 子……三條西實隆

旅 幕 下……細川高國入道

同 寺 文 書

當寺轉位住持職等可令准天龍寺之事、依常桓禪門申沙汰、勅許珍重、委細之芳書爲規則達、天聽了、舊冬可獻愚報之處、遅々爲怠候、他事期後信、不宣敬白、

正月廿日

(享祿二年)

永源寺住持丈室

堯

空……三條西實隆

#### 第四十一章 德政張行と永源寺祠堂錢の特免

德政は總ての貸借や年期契約等を棄破し債權者を苦しめ債務者を益する社會主義的行爲なり。足利時代最も流行したり。嘉吉元年佐々木滿綱が近江國に德政張行せし時の制札は蒲生郡奥津島神社に現存す。享祿四年十二月佐々木定頼は近



江國中に德政を張行す、然れども特種寺院の祠堂錢は棄破せざらしむ。左記文書は永源寺の祠堂錢に對し特例を許せしものなり。

永源寺文書

雖爲國中德政當山祠堂錢之事者、任大法不可有棄破之條、其段可被存知之由、被仰出候也、仍執達如件、

享祿四年十二月二日

忠 廣花押  
高 雄花押

飯高山永源寺

納所禪師

寺院の祠堂錢は淺井亮政の北郡德政條々の第二條にも記されて破棄せざるを云へり。之を永源寺文書に對照するに同月二十三日定頼も飯高山六箇寺の祠堂は大法に任せて棄破せざるを達せしむ。左記亮政の條數第六條には敵味方の別を記し戦時の狀況を髣髴せしむ。

伊香郡永原村菅浦共有文書

德政條々

- 一 借錢、借米之事、
- 一 借書を賣券に相調ル借物可有棄破、但去年丁酉其下地之年貢藏方へ於令納所者不可行德政、並祠堂錢之事、
- 一 一年季本物之事、付劫米
- 一 諸講並頼子之事、
- 一 賣懸買懸之事、
- 一 雖爲敵之輩、至于降參者、可爲如惣並又從敵方借族、兼後々於返辨者、音信同前之條、堅可爲罪科事、
- 一 雖爲預リ狀、加判並者可<sub>レ</sub>行德政、
- 一 絹布者十二月、金物者限<sub>レ</sub>廿四月へき事、
- 一 借狀に雖書載何様之文言、可<sub>レ</sub>行德政、萬一不出借書之輩、雖有之、當德政已後者可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>反古事、

天文七年戊戌九月二十一日

淺井亮政

永源寺文書

雖爲國中德政當山祠堂錢之事者、任大法不可有棄破、六箇寺爲祠堂錢者、諸各庵段勿



論候條、六箇祠堂於無紛者、不可有異儀之由、被仰出候也、仍執達如件、

天文七年九月二十三日

忠 廣花押  
高 雄花押

飯高六箇寺

永源寺文書

當山諸寺庵詞堂錢之事、雖國中德政、被仰付諸五山、如大法不可有相違、然上者縱雖

□事 □儀之由、被仰出候也、仍執達如件、

天文二拾壹年十一月廿二日

賢 祐花押  
高 雄花押

飯高六ヶ寺諸各庵中

### 第四十二章 京極高慶の部下金剛輪寺に遊ぶ

京極五郎高慶は後に高吉と改む。京極治部少輔材宗の息なり。高慶の事跡は頗る分明ならず。享祿元年八月高濤の子六郎高延と内保河原淺井郡に戦ひたり。親の敵は子の敵として對抗したらん。此人天文二年池寺附近又は當郡に在りし頃其部

下の臣等徒然の時多人數にて金剛輪寺に來り遊びしことあり。寺よりも音信の酒樽を高慶に贈りたり。

金剛輪寺下倉米錢下用帳

天文二年十一月

百文 五郎殿様へ樽御肴代

六十文 同奏者への肴代

三斗六升 五郎殿様御中間、御小者、力者あまり徒然之間、ひとつ可給由之間、一宿

飯酒九人分

五郎殿様、御前衆上下十一人あまりに徒然ニより爲遊山被申、御登山の時、

### 第四十三章 佐々木定頼の淺井亮政征伐と薩摩浦の船

天文四年佐々木定頼は京極氏應援の爲に兵を江北に出し淺井亮政を征す。定頼征北の事決するや湖上船奉行大塚八郎右衛門をして沿湖の船を徵發し軍器軍糧及び戰士の運送に従事せしむ。當時我が薩摩浦稻村大よりも二艘の船に六人の水手を



徴發され四日間軍務に従事したり。

蒲生郡島村長命寺記録

天文四年乙未二月大結解米下用

中略

七 升 二月十七日、御屋形様、北郡へ出陣、浦船之事ニ奉行大塚八郎右衛門方

上下五人兩度ノ飯米下、

三斗六升 北郡へ御陣、薩摩浦へ船步、二月十八日より廿一日迄船二艘、人毎日六

人、一人ニ一升五合ツ、下飯米下、

とありて長命寺の出納方が入用の飯米を支拂たる記録に戰國時代薩摩浦の船や船人が軍事に従事せしを記す。此くて定頼の軍は十八日より北進し二十日に犬上坂田の郡境なる佐和山城より番場の鎌及城方面に戦ひ凱旋したり。坂田武士今井氏の重臣島氏の記録中に左の二文書あり。

來ル廿日可及一戰候、其口被見合、働管要候、委細妙觀院、可申候、恐々謹言、

二月十八日

定

賴花押

今井尺夜及殿へ

折帛旨得其意候(靈仙山)りやうせんにいたり被打出之由、祝着候、多賀畑、平野館、其外令放火候、かまのは之儀追て可申付候條、まつく、可有歸陣候、早々働祝着候、如此段最前以

妙觀院申べく候、恐々謹言、

二月廿一日

定

賴花押

今井藤兵衛殿

妙觀院は栗見庄の妙觀院にて六角家の爲に使者として北進し活動せしを證す。

第四十四章 佐々木義賢の犬追物張行と金剛輪寺へ犬の徴發

剛輪寺へ犬の徴發

犬追物とは犬追物射の略稱にて騎馬にて犬を追射する武士が一種の技藝なり。鎌倉以後武家の間に盛に行はれしものにて我近江の守護家たる佐々木氏にも代々之を行へり。犬追物は一區の地域を畫し竹矢來を圍み中に圓形の場を設け十疋の犬を放ち墓目の矢を以て馬上より射るなり。射手、檢見、喚次、幣振、日記付、鬪振、犬放河原者等の役を置く。犬は百五十疋を一度に十疋づゝ十五廻とす。佐々木氏觀音寺城頭に馬場を構へ將士をして犬追物を行はしむ。今に其趾を存し犬追物馬場と稱



す。天文八年十月佐々木定頼が其子義賢に加冠せし後犬追物を興行せし時、金剛輪寺へも犬五疋を引き来るべきを沙汰したり。寺に畜犬せしと見ゆ。

金剛輪寺下倉米錢下用帳

- 八 升 御犬御座候間、犬五疋引候て可參由、被仰出、十介方被來候、一宿之飯酒
- 五 升 同犬引候て參候、臨時食、
- 四 升 御犬之事ニ從能登右馬允殿孫七郎方被來候、上下飯米酒、
- 七 升 犬引候て遣臨時食、
- 四 升 御犬事ニ鈴村甚五郎方被來候、飯酒、

第四十五章 猿樂能と能太夫舞太夫唱門師

足利時代猿樂能として近江には坂本山階日吉の三座ありて之を近江の三座と稱し有名なるものなり。坂本日吉は滋賀郡山階は坂田郡神照村なり。金剛輪寺の足利中世以降の下倉米錢下用帳中に、日吉太夫、北一座等あるは三座の内なりとするも、其他に蒲生郡大森玉緒にも梅島太夫なる一座ありて毎月同寺に来るを記す。其他北郡舞太夫あり伊香郡森本の舞太夫なるべく、又唱門師が正月に舞ひしを記す。近江

に於ける能樂猿樂、舞々太夫、唱門師の史料として一章を立て置く。

壹貫三百文 日吉太夫式日相過候間、能事ハ成間敷と申候て扇の代也、

七十二文 日吉太夫式日相過、能を可仕之由申候、然共先年御佗申上、三上殿折紙

有之間、其通觀音寺へ申届時、兩三度上下二人飯料、

百 文 北一座衆、勸進ニ來時、あふき代、

五十文 同事常力、座敷あふき代、

百 文 同座敷、平家語申、色々寺家衆御出の時、酒肴の代、

五十文 北郡舞太夫あふきの代出也、

百 文 同時寺家衆、御出之時、舞開時、酒肴代、

卅五文 くい一座敷來様、十介方酒ノ代、

百 文 大森座當年も能可仕之由、申候間、能右馬殿へ遣候樽一ツ代、

二百文 大森座、能可仕と申して、二□來候間、東谷於谷堂一つのませ候、酒ノ代、

百 文 同肴の代、一座參り候へ共、皆返し申候、

五十文 高雲能の事、若衆談合之時、酒代、



一ノ七百文 日吉太夫、當月能之番にてたる、各談合にて留申候、禮ニ出之、御使遠殿也、

五十文 大森梅島太夫、毎年能可仕之由、

二百文 わわうの物□五郎介ニ出之、

百文 正月にまひ舞候間、生門事ニ出之、  
(唱門師)

### 第四十六章 天文五年の法華亂と百濟寺堂

#### 衆六人の從軍討死

天文元年八月本願寺光教如證と對抗し山科の御堂を焼討せし法華衆徒は同五年七月延曆寺の僧徒と對抗したり。始め延曆寺の花王院京都に出で、説法す。聽衆に法華宗の松本新左衛門なる者あり起て宗旨を論し花王院を屈す。法華衆徒痛罵雷同す僧徒怒て兵を擧げ法華宗徒を撃たんとし援軍を佐々本定頼に請ひ多數の山徒は京都に出づ。二十三日定頼東山に陣し宗徒と戦ひ妙泉寺を焼き二十四日には立本寺を二十五日には妙顯寺以下多くの同宗寺院を灰燼したり。二十七日法華二十一ヶ寺宗徒は難を和泉の堺に避けたり。此の戦亂に百濟寺の學生にして堂衆たり

し僧侶も出陣せしが二十三日の戦に其内六人戦死したり。百濟寺南谷にその追善塔を建つ。

百濟寺古記目錄享保十七年四月

一天文五年丙申七月廿三日、法花亂ノ時、當寺學生、堂衆之内、於京都討死六人、追善塔在<sub>二</sub>南谷<sub>一</sub>。

長享年後畿内兵亂記

天文五年七月廿三日、自叡山日蓮黨爲退治、佐々木定頼人數等軍于東山、同廿七日落居、下京悉火。

### 第四十七章 金剛輪寺下用帳に見ゆる押立合戦

金剛輪寺天文年間の下倉米錢下用帳斷片中に押立合戦に手負人ありて百濟寺や池寺西明寺より見舞狀を受けしを記す。而して其前行に安孫子より使者二人來りて秦川出儀のことを告げ、次に押立より一段出て來りたれば手遣ひあるべきを夜中に告げ來り、やがて蚊野喧嘩出錢云々を記すれば押立庄と安孫子庄との水論に戰華を唆かしたるを推想せしめ、更に岩倉の矢取地藏縁起を追懷せしむ。



金剛寺下倉米錢下用帳

十六文 秦川出儀付て、安孫子より使者兩人來、時酒ノ代、  
 廿四文 押立一段出候間手遣可在之由にて安孫子より夜中ニ兩人被來候酒  
 代、  
 廿文 蚊野喧嘩出錢、  
 十二文 押立合戰ニ手おい有之儀、無心元由被申候て百濟寺より狀持來時酒  
 ノ代、  
 十二文 同事ニ池寺より狀持來使酒ノ代、

第四十八章 勢多川掘鑿費と永源寺

天文十七年琵琶湖治水計畫として勢多川筋の掘鑿を行ふ。衰殘の幕府此の事業を計畫し其費用は近江全國に賦課したり。永源寺は其寺領諸税免除なれば今回の賦課も免除さるべきを訴へたれば十二月十三日佐々木家の奉行人野寺忠行後藤高雄は永源寺六ヶ寺の寺領は勿論近江國中の免許の地には賦課を破棄したるを沙汰したり。江戸時代には時々勢多川浚渫の事行はれしが足利時代に於ける同川の掘

鑿は從來未だ知らざる所なり。

永源寺文書

飯高六ヶ寺、并諸各庵領事、從先々諸公事被成御免許段被聞召訖、勢多川堀雜用之事者、國中御免許被破棄間、向後不可成引懸由、被仰出候也、仍執達如件、

天文十七年十二月十三日

忠 行花押  
 高 雄花押

飯高六ヶ寺

同諸各庵中

第四十九章 後奈良天皇綸旨を下して永安寺を等持寺に准ぜしめ給ふ

天文二十二年五月二十四日後奈良天皇は永源寺六刹中の永安寺に其の住持職は勅請禪刹として京都等持寺に准すべく、依て弘法紹隆と寶祚長久を祈願すべき綸旨を下し給へり。右中將庭田重保聖旨を奉行して住持日岑和尚に傳ふ。綸旨左の如し。



永源寺文書

江州瑞石山永安寺住持職之事、  
早應勅請禪刹之位令准等持寺、宜專弘法之紹隆、奉祈寶祚之長久、者  
天氣如此、仍執達如件、

天文二十二年五月廿四日

右 中 將花押

當住

日岑和尚禪室

第五十章 江雲寺の建立と竹木の徴發

江雲寺は佐々木六角定頼の菩提寺なり。定頼は佐々木六角氏末期の英主にして  
戰國時代南戰北争に忙殺され然も卓越なる武力と非凡なる文學とを有し文武兼備  
の豪將として一家を泰山の安きに置きしのみならず常に衰殘せる足利幕府の救主  
として群將中に重きを爲せり。蒲生郡志 卷二參照天文二十一年正月二日五十八歳を以て薨す。  
嫡子左京大夫義賢は亡父の爲に觀音寺城下の常樂寺安土村 常樂寺に江雲寺を創立して菩提  
を弔ふ。其寺の建立は天文二十三四年の頃なるが建築材料を博く近江國中に徴し

たり。當郡内にも竹木の徴發を受けし所少からざる可きも史料の存するもの少し。  
蒲生郡中野村今堀共有文書中に「江雲寺殿へ竹請取之事」と記し其村より竹五十七本  
の請取に「天文二十四年九月二十四日」と記さる。蒲生郡志 卷二金剛輪寺下倉米錢下用帳中に其  
事に關するもの三四ありて多大の木竹を應徴したるを記す。

四 升 江雲寺殿様御用之材木事ニ御大工左□より切候て常樂寺へ急度進  
上可申之由、被仰來時、上下飯酒、

四 升 次日朝、飯酒上下、

三 斗 同松林坊之木五本、今蓮坊之栗一本、寶城坊之杉一本、伐候時、飯酒、

一 升 同事人足御佗事ニ左□所へ書狀遣候はんじ食、

五十文 江雲寺殿御用ニ竹切ニ上使御出時、御酒申候時代、十五日間御出也、

百 文 同上使、日中麥之代

六十四文 同味噌之代

五十二文 同時酒ノ代

百 文 同十六日中、麥之代

六十四文 同味噌之代



五十二文 同酒飯代

六十四文 同御上使逗留間、二の膳仕候、買物色々代、

百卅文 同十七日朝西の屋敷竹可見之由、被申間、寺家衆皆々御出候て内談之

時、御上使ニ理申分候て、寺家より竹を切候て可遣之旨被仰宛、一日寺家衆御逗留也、

以上の記録によりて先には坊中三所にて七本の材木を徴發伐採され、後には上使連日逗留して寺中屋敷の竹を切り取らんとす。寺僧は上使なればとて二の膳を饗して優待したる様も見ゆ。他の百濟寺や大覺寺や神社の巨木及び村落へも同様に竹木の徴發ありしならん。

### 第五十一章 觀音寺城の石垣築造と費用の賦課

弘治二年佐々本義賢居城觀音寺城の惣人所の周圍に石垣を築造す。惣人所とは多數軍士の會合する廣場なるべし。山上に石垣を築くは事容易に非らず巨石を高きに運ぶこと連月、其人夫や費用を要する多大なる知るべきなり。城郭に石壁を周らすは鐵砲の傳來による要求にして實に我邦築城法の革命時代なりき。佐々木義

賢が石壁築造も即ち其革命に促されたるなり。蒲生郡老蘇村と安土村とに跨る觀音寺城趾に上りて數多き城郭周圍の石垣を實見すれば如何に當年の大事事なりしやを知るべし。天正四年より織田信長が安土山上に築きし安土城壁の偉觀に驚く之士は試に觀音寺城趾に上りて之を比較研究すべし。安土城壁を觀音寺城壁に比ぶれば其完美なる點に於ては安土に及ばざるも安土築城の規模は正に範を觀音寺城に取りたるは首肯すべし。かゝる大工事に際してはその工費の多大なる想像するに餘りあり。安土城は信長公記によれば七ヶ國の人夫を徴發したりと見ゆ。觀音寺城は近江守護家の城郭なれば多くは近江人を使役したるものならん。近江國民の祖先が流汗淋漓の苦役も想像するに堪ゆ。其苦役に従はざる大寺大社には亦その費用を徴收されたり。金剛輪寺下倉米錢下用帳中に左の記事あるは當年の片影なり。

八 斗 御屋形様惣人所下、石垣打可申之由被仰出、谷十介方被來候、上下一宿飯酒、

六 升 同石垣之事ニ談合衆會酒、

二斗八升 同石垣之事ニ三上宗左衛門殿に樽一荷遣候、



- 一 升 同樽持行食、
- 八 升 御屋形様御石垣打申ニ付て、西座より賄之事御訴訟申上之由候て、谷十介方被來候、上下飯酒、
- 一斗二升 同賄之事申候て、谷彌太郎殿方へ樽一ツ遣候、
- 一 升 同樽持行食
- 六 升 同石垣賄事、西座申之間、談合之衆會酒、
- 六 升 同賄之事、西座之内より扱之事申候て來候時酒、
- 八 升 同事ニ十介方扱申度之由被申、孫兵衛被來候飯酒、
- 八 升 次日飯酒、
- 一 升 賄之事ニ三上宗左衛門殿狀持行、
- 一 斗 御屋形様いしかき賄事、西座出入候へ共、出狀仕相果候時酒肴、
- 一斗六升 上之御石垣之事ニ三上殿使者十介方賄之事、西座申通被仰候て、御出之時、上下兩度飯酒、

参考 右記事中御屋形さあるは近江屋形佐々木氏のこと、谷十介や谷彌太郎は武佐に住せし佐々木氏の武將、三上宗左衛門も同武將なり、西座より訴訟出入さあるは一山中の西谷を差せしか分明ならず、

### 第五十二章 佐々木義賢押立堤の立木伐採を禁止す

弘治二年佐々木義賢は押立郷堤塘の竹木伐採禁止の令を出したり。目賀田氏は佐々木氏よりの禁制案文を添へて之を所在に報じたり。目賀田氏は目加田に在館せし豪族にて當年郡奉行たりしならん。金剛輪寺弘治二年の下用帳に左の一項見ゆ。

一斗六升 押立堤木伐之事一切ニ御停止之御成敗持被來候、目賀田殿より御中間相副御成敗之案文在之、

### 第五十三章 佐々木義賢の伊勢征伐と金剛輪寺の陣見舞

弘治三年佐々木義賢は伊勢三重郡柿村の柿城を攻む。柿城は關氏の重臣沼木三河守の據りし所なり。此進軍を勢州軍記には三年三月のこととすれども近江に於ける史料にては六七月の頃なるを證す。此の征伐には佐々木氏の大軍が千草八風兩嶺を越えて進軍したるにて従軍の軍夫も莫大の數に達したり。蒲生郡得珍保野中村玉緒の沙汰人に軍夫徴發の餘裕の有無を尋ねし時、沙汰人の答書に兵糧取に歸候者、



又病氣手負、或は番替など申候て少の間罷歸候者はし／＼に少し御座候爲體候と見ゆるは出戰中に於ける郷村の狀態を明にするものにて、六七月の農繁期に夫は軍役に苦使せられ老幼と女子が耕耘に従事する狀も察せらる。當郡内に於ても同事態にて東小椋村より八風峠の山路を重き兵糧米や軍器を運びし郡民祖先の勞苦や追想すべきなり。當時金剛輪寺にては佐々木氏始め部下の諸將に出陣の禮物を贈り又陣中へも使者を派遣して其勞苦を犒ひたり。

金剛輪寺下倉米錢下用帳

弘治三年

- 四 升 安孫子殿定使、勢州へ御陣立、樽遣候へと申て來時飯酒、
- 三 升 勢州柿城へ三上殿御座候間、遣候臨時食、
- 四 升 勢州表之事、能登右馬允殿、甚五郎方者來候飯酒、

### 第五十四章

佐々木義賢の佐和山出陣人質を金剛輪寺に預け警備せしむ 附河瀬番屋

江北の淺井氏と江南の佐々木氏の對抗戰事は淺井氏は亮政佐々木氏は定頼の時

より開かれ爾來幾回を重ねてもつれ絲の結で解けざる如き狀態なりき。定頼の息義賢、孫義治と亮政の子久政、孫長政の代に至りても猶歴史を繰返すのみなりき。天文二十一年正月二日定頼死して後淺井久政は更に南進の策を決し戰備を修す。享祿四年以後佐々木氏は犬上以南の地をその勢力範圍に占領し居たれば犬上坂田の郡境なる佐和山城と米原の太尾城とは北方の門戸として警備を解かず常に番兵を交替して淺井氏の南進に備へ居たり。此年六月淺井久政其子長政は兵を募りて南進せんとす。報を得し義賢亦戰備を修し出陣せんとす。但し犬上愛智の地は元來京極氏に屬せし所なれば衰殘すと雖も京極氏猶存し之に代る淺井氏の活動には兩郡内に勸誘の便を有す。戰國武士通有性の去就變節を恥とせざる時代に於ては敵味方共に常に武士の行動に意を安ずる能はず。こゝに於て血族近親を出して先方の質と交換して他意なきを約したり。之を人質とす。義賢の臣進藤山城守貞治が坂田武士今井權六定清に送りし文書鳥記に、

就北郡窄人出張、雜說之儀、近日從小谷以兩使被申通候、委百々方へ申候、出張於必定者、其砌御兩所御人質、佐和山迄越候様仁可申入旨候、北衆のは何茂小谷へ被遣候、並窄人衆徘徊、同柏原邊上下通路、從其邊無正躰候、是又堅被仰付候様に可申旨候、内々



人體をも申來候、此方之儀聊無相替儀候、何時にも敵依働、我等佐和山迄罷越可申談候、可有其御心得候、御馳走管要候、委曲百々可被申候、恐々謹言、

六月廿七日

進藤山城守

貞

治判

今井權六殿

御宿所

此一文在りて義賢へも人質を取り又淺井久政も小谷城中へ人質を取りし事をも明にす。當郡武士も亦其例に倣ひて人質を出せしを推想すべく、此くて七月下旬に佐和山城に出陣せし義賢は諸將より取りし人質を金剛輪寺に預け警衛せしめたり。同寺の下倉米錢下用帳に左の記事あり。

廿四文 八月十八日上様より佐和山へ被召候時、年行事一人りんじ一人兩人

夕飯、

廿六文 同十九日ニ人質可預由夜中ニ罷越御請申時佐和山にて最飯、使節兩

人わんじ一人、三人分、

廿六文 同時逗留仕時、夕飯三人分、

廿六文 同時上様より御返事不出□□逗留仕候、朝飯三人分、

廿文 同時於路次遣錢也、

年行事の僧が佐和山城よりの召に應じて登城し人質を預れとの命に應じて歸りしを明にす。然のみならず同文の續きに河瀬に番屋を設置し何かの警護を爲せしを記す。河瀬は犬上郡河瀬なり。戰時に局外中立の寺院にも此の如く軍事に忙殺されたり。

十八文 河瀬番請取申由、注進ニ罷越時、於路次(中食の事)日中三人分、

廿六文 同上様御すきなき由候間能右馬(能登右馬九)不令申上候條、逗留夕飯三人分、

十八文 御返事出罷歸時、日中兩三人分、

廿八文 たいまつ夜中ニ特行時、人夫(濁酒)にこり酒代、

廿一文 河瀬番屋竹取時、承仕三人、のませ申時酒代、

廿文 河瀬番儀、東西上八人、相除時、談合肴代、

第五十五章

佐々木大原高盛東圓堂所務のことに

つき明藏主及び倉垣菅八郎に依頼す



佐々木氏の支家大原高盛は後ち名を高保と改む。永正大永より天文弘治の頃の人なり。郡内東圓堂豊國村の大字に大原家の所領ありしか將た興福寺の代官なりしか分明せざるも重臣水原長門守を奉行として差遣し、所務のことにつき明藏主及び倉垣菅八郎にも盡力方を依頼したり。倉垣氏は蒲生郡市原庄石谷村に館せし武士なり。

倉垣文書 京都帝國大學所藏

東圓堂所務之儀仁付而、水原長門守差越奉行候、近所の事條馳走可爲祝着候、賀藤佐渡入道奉行茂付置之由候間、同前ニ入魂候様、村田内膳助ニも可被申届候、猶高誠可申上候、謹言、

十月廿七日

高

盛花押

明藏主

倉垣菅八郎殿

文中に賀藤佐渡入道、村田内膳助の名見ゆ。此の賀藤氏は屋守入木莊村矢守に住し、村田氏も豊満神社文書天文二十四年四月の渡御次第書中に村田藏人貞秀、村田孫四郎秀政の連名あれば、東圓堂附近に住せるを知る共に室町時代の勢家なり。

### 第五十六章 永源寺佐々木義賢に卷數を送り出陣を見舞ふ

義賢が佐和山城に出陣せし時、高野永源寺中の含空院主は祈禱を修せし卷數かんじゆを佐和山城の義賢に贈り、出陣見舞の禮を行ふ。八月二十二日、義賢之に答ふ。

事林明證 前田侯爵所藏

就出陣之儀、卷數給候、祝着候、猶隱岐孫右衛門尉可申候、恐々謹言、

八月廿二日

義

賢花押

含空院

### 第五十七章 佐々木義賢百濟寺淨光坊の物を贈るに答ふ

某年九月、百濟寺々中東谷の淨光坊は深山櫛と柘榴壹籠とを近江の守護佐々木義賢に贈りたり。十一日、義賢答狀を送り、其好意を謝す。

同寺文書 寫

第五十七章 佐々木義賢百濟寺淨光坊の物を贈るに答ふ

六六九



深山檜、並柘榴壹籠送給過分之至ニ候、猶落合出雲守可申候也、恐々謹言、

九月十一日

義

賢花押

百濟寺

浄光坊

端書 此文掛物也、然ニ元文元年丙辰霜月晦日、岩本坊火災之節焼失、

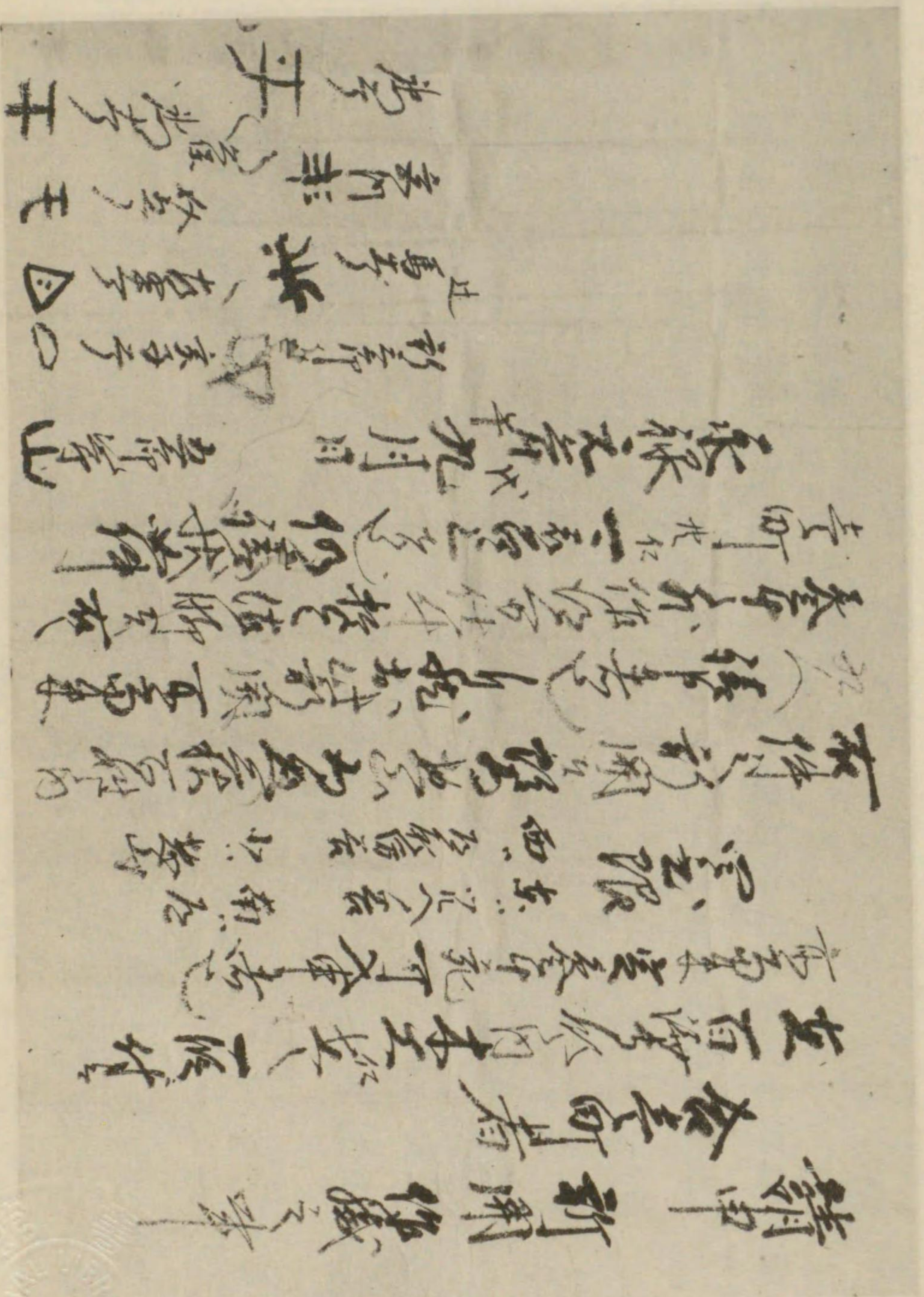
### 第五十八章 百濟寺領大萩新田の請狀

當郡の古刹百濟寺には足利中期以後盛に荒蕪を開墾して水田となし寺領を増殖せり。寺藏大永年間の記録中に新開田のこと多く見ゆ。天文弘治の間角井峠を越せし大萩村の山上に於ても新田開墾を進めたり。永祿元年九月大萩の村人九人より新開田壹町を請作し壹反歩に米三斗宛を寺納するを約せし請狀あり。新田史料として稀有のものなれば撮形を挿入し置く。

百濟寺文書

請申、新開作職之事

合壹町者



永祿元年九月大萩村開墾小地作狀

百濟寺藏所



在百濟寺領之内木工ニ在之、一段ニ付而所當米、定參斗宛可入申候者也、

四至限 東ハ、ツルヘ谷 南ハ道  
西ハ、道願坊谷 北ハ惣山

右件之新開者雖爲惣山爲大萩百姓之内九人請申者也、自然於此新開所當米參斗之外、作得分仕付於合沽脚者、右之壹町共仁可被召上者也、仍而請狀如件、

永祿元年 戊午 九月日

新	三郎	花押	五郎	次郎	花押
辻	馬太郎	花押	亥子	二郎	花押
宮	内	花押	左近	太郎	花押
衛門	二郎	花押	久保	介	五郎
			衛門	太郎	花押

### 第五十九章 肥田城の水攻

永祿二年正月小谷城主淺井久政は其嫡子猿夜乃十五歳に及びければ之に首服を加へ新九郎と稱し六角義賢の偏諱を受けて賢政と名づけ、(後改長政)豫ねて婚約を結び養ひ置ける六角家の家宰平井定武の女を以て之に妻はす。長政氣慨あり六角氏の下



風に立つを欲せず四月終に意を決し妻を離別し父の家に送還し以て六角氏と絶つ  
の意を示せり。平井定武事を六角義賢に告ぐ義賢大に怒り直に北伐の軍を起さん  
とせしも比年三好長慶と争ひし爲め國力漸く疲弊したれば直に軍備を整ふるを得  
ず先づ調略を以て淺井氏に屬する佐和山城を招降せんとしたり。

一方淺井賢政は年少なりと雖も祖父亮政の氣節を敬慕し六角氏に對する戰備を  
修するに怠らず。坂田犬上はいふも更なり遠く愛智郡の武士をさへ招降するに勉  
めたり。肥田城主高野瀨秀隆は六角氏に含む所にもありしにや早く淺井氏の誘  
降に應じ義賢父子に對して反旗を擧げたり。其他犬上八町の赤田定興、高宮信氏等  
も淺井氏に屬す。義賢報を聞き大に驚き先づ兵を出して高野瀨氏の肥田城を攻む、  
城堅うして抜く能はず乃ち之を水攻めにせんとし周圍に堤を築き愛智宇曾二川の  
水を引きて之を注ぐ。近江輿地志略肥田城の條に

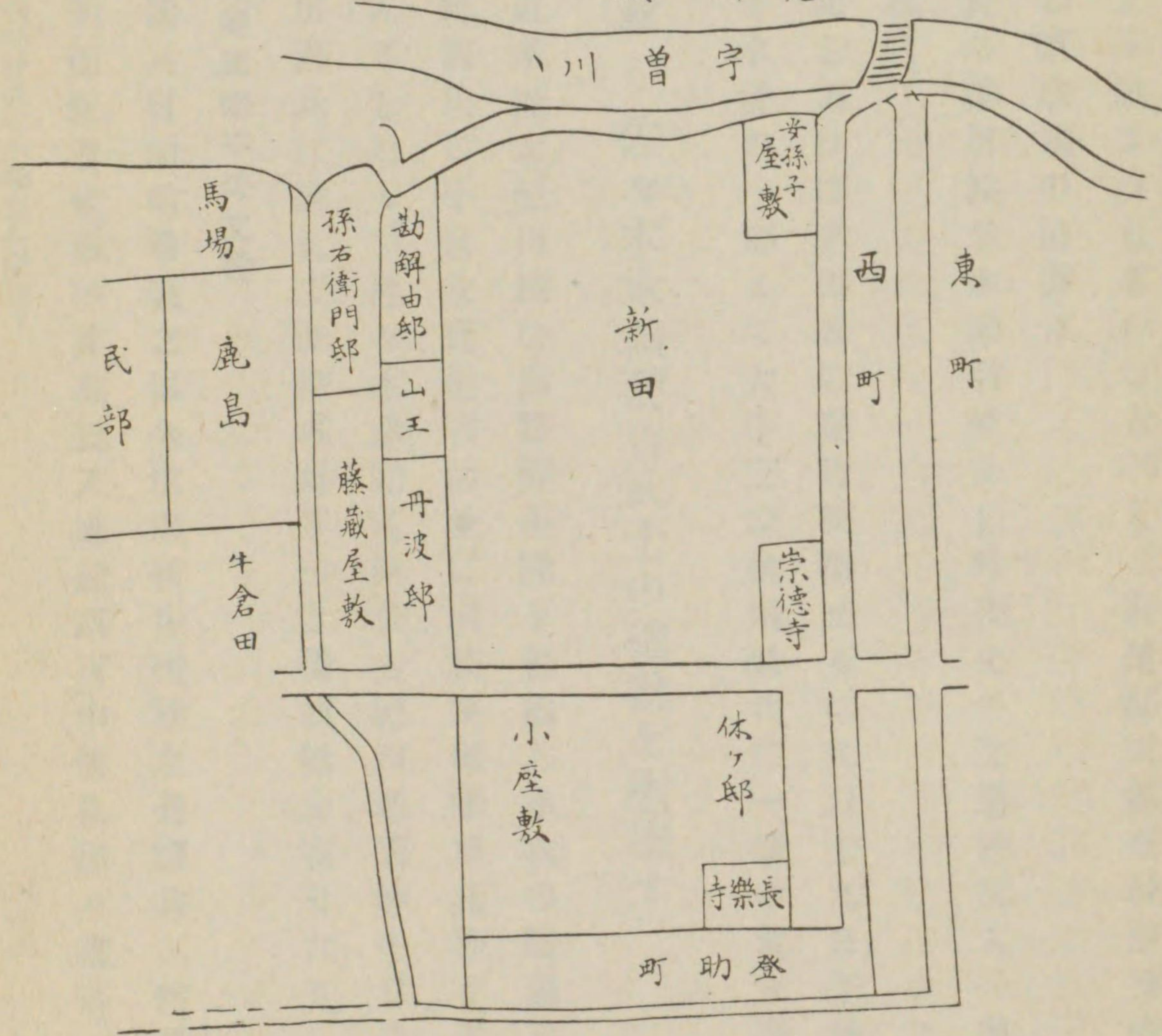
古城趾 肥田村に在り、高野瀨備中守在城の趾なり、大永<sup>享祿</sup>年中地頭山の合戰に  
死す其子備前守秀澄永祿の始淺井に與力す。佐々木承禎義弼巡り五十八町横十  
三間に堤を築き、宇曾川愛智川の水をせき入、永祿三年<sup>二年</sup>四月三日より水攻にす、  
然るに五月廿八日大洪水にて不慮に堤崩れ水忽に落ちて運を開くと。

肥田城趾之圖

慶安三年開墾 現在面積三町六段餘

(大津三字)

越川城



稻枝村大字肥田



右の説は古老の傳説より記されしものなるべし。坂田郡南郷里村惣持寺文書に木村行忠の如意光坊宛の請取狀の追書に

次昨日申刻に肥田表の堤切候て水悉引候よし昨夜北へ注進候、扱も一興候、可爲御存知候へ共、令申候謹言、

永祿二年九月廿日と記しあれば肥田表の堤防決潰せるは九月十九日午後四時頃なりしを知るべし。當年水堤の一部とて大字三津越川城北に一條の太き堤を存す。

### 第六十章 佐々木承禎愛智武士の確執を慰撫す

恰も佐々木義賢入道承禎が肥田城に高野瀬秀隆を包围し水攻の築堤に忙殺さるゝ頃目賀田の城主目賀田氏と小倉左近進吉治並に同族栗田修理亮等と夫役の事につき争ひ大事に至らんとしたり。佐々木承禎は時恰も肥田城對陣中なればとて平井定武をして小倉栗田兩氏に諭して此際堪忍すべき様折紙を寄せたり。

稻村下岡部栗田幸平氏文書

今度目加田与夫役儀ニ付而喧華表之儀令堪忍候、甚神妙之覺悟共ニ候、肥田表此分ニ候條時分柄氣遣別而祝着候、猶平井加賀入道披露可申候也、恐々謹言、



九月七日

栗田修理亮殿

同上 文書

承

六七四  
禎御判

今度目加田與事相之儀無是非次第候、時分柄堪忍甚神妙覺悟忠節候、向後如斯理不盡之義於在之者、嚴重可申付候、猶平井加賀入道披露可申候、恐々謹言、

九月七日

小倉左近進殿

承

禎御判

### 第六十一章 野良田合戦

肥田城水攻に功を奏せざりし六角義賢父子は其後漸く戦備を修し翌永祿三年八月に至り愈々意を決し北伐の大軍を起し中旬を以て先づ肥田城に攻入らんとし兵を部署す。蒲生賢秀、永原永興、進藤賢盛、池田景雄を先陣とし、檜崎壹岐守、田中治部太夫、木戸小太郎、和田玄蕃、吉田新介を二陣とし、義賢自ら中軍に將とし、後藤箕浦、田崎山田以下の諸將を後陣とし、總勢二万五千騎と注せり。肥田城主高野瀬秀隆急を淺井賢政に告ぐ。賢政乃ち百々内藏助、磯野丹波守、丁野若狹守を先陣とし、五千餘騎を進

め賢政は赤尾、上坂、今村、安養寺弓削、本郷の諸將を従へて六千餘騎、肥田城近く進み出で宇曾川を隔て、對陣す。既にして戦機熟し北軍の將百々内藏助は川を渡りて南進し、義賢の將蒲生賢秀と開戦し、必勝を争ひしに南軍の二陣、檜崎田中等横より進みて急に北軍に迫りしかば北軍忽ち敗走す。内藏助大に怒り留り戦ひ、賢秀の將結解十郎兵衛の爲に殺さる。南軍益々勢を得て進撃す、賢政之を見て安養寺氏秀、今村氏直を招き謂て曰く、敵兵勝に乗じて進む意驕り氣疲る。汝等時機を見て精兵を放ちて突撃すべし。我れ敵の動搖するを見て本陣を衝くべしと兵を分ちて二隊とし一隊は賢秀の勢に當らしむ、兩軍野良田表に接戦し、蒲生の一門なる伊勢の千草氏戦死し、賢秀の軍敗走せしかば南軍の二陣代らんとして互に犇めき合へり。時機來れりと賢政自ら手兵を率ゐて突進して、義賢の本陣に殺到す、義賢防戦力めしも其銳鋒に堪る能はず退却し、諸軍終に潰走し南軍終に大敗す。此戦南軍の死傷九百四十、北軍七百餘、宇曾川南の平野死屍算を亂し、光景慘憺たりき。賢政の武威是より大に揚れり。之を宇曾川の戦ともいひ又肥田表の戦とも云へり。此の戦に湖上沖の島の島人も南軍に従ひ負傷したれば、義賢は馬太刀料を贈りて其功を賞したり。後ち賢政名を長政と改む、義賢の與へし諱字を避けしものなり。



御狀令拜見候、仍先度於肥田表被疵衆に從御屋形様御馬御太刀被下之由、尤御名譽之次第共候、就其□に被入候船頭之儀、御迷惑之由、御理之旨無餘儀候、隨分馳走可申間、可被御心安候、いさゝか不可存由斷候、猶御使へ被申候條、不能一二候、恐々謹言、

九月四日

深七兵

天

沙花押

冲島

各々中

江濃記

野羅田合戦事

爰に六角屋形義賢是を聞て大にいかり、當家は頼朝郷の御代より、此方代々惣領の號有て、江州に冠長たり、然るに中古より京極家上の寵臣と成て、四職の數に列なり、惣領家をへしまして、雅意にまかすといへども、力なく數年をわたる處、天運循環して京極家滅亡し、其家來淺井等當方の太刀影によりて、主の跡を押領し、威強大に成て當方に背事、誠以奇恢なり、其儀ならば不日に發向して誅伐すべしと、義賢自身

打立給ふ、先陣は蒲生右兵衛太夫、長原太郎左衛門、進藤山城守、池田次郎左衛門、二陣は、檜崎壹岐守、田中治部太夫、木戸小太郎、和田玄蕃、吉田新介等、後陣は、義賢馬廻、並後藤箕浦、田崎、山田、以下其勢二萬五千餘騎、野羅田表へ出張して敵をそしと待かけた、り、淺井父子是に驚き、則勢を催し、百々内藏助、磯野丹波守、丁野若狹守を先陣の大將として、五千餘騎出張し、後陣は淺井備前守長政、赤尾、上坂、今村安養寺、弓削本郷を前後左右に隨へて、六千餘騎野羅田表へ押出す、頃は八月中旬巳の刻斗に、敵味方馳向ひ爰をせんと防戦、先一番に北江州の大將百々内藏助と日野蒲生とわたし合、二時斗責戦ひ互に一足も不引挑合ける時分、田中治部太夫、檜崎、土肥横合にかゝりければ、北近江衆忽に敗軍して、左右へわかれて引退きけるが、大將の百々内藏助引返し申けるは、南北のわけ目の合戦なり、今日の先陣承り、味方敗軍するとて、爰を引ては後日に如何にして人に面をむくべき、吾とおもはむともがらは、續けやとて取返し、小高き處に馬をかけ居けるを、大將とや見たりけむ、蒲生が内に結解十郎兵衛と云者はせ來り、をしならべて無手と組て落けるが、百々は大力にて十郎兵衛を取てをさへ、首をもらむとしける處に、十郎兵衛が郎等二人落合、終に内藏助が首を取て、みたらしの馬驗と取添て指上たり、是を見て淺井かたには力を落し、南郡衆は



きはひける、浅井備前守、安養寺三郎左衛門、今村掃部助を近付、今日は南北のわけめの合戦なり、命を何の爲にをしむべき、先陣戦屈して引退、あまつさへ内藏助打死し、味方力を落すといへども、敵は是に勝ほこり少油断して見ゆる、其上敵先陣殊外草臥たむなり、然ば味方の荒手を以て、手いたく一あてあて、みよ、敵若動搖せば押立て、敵の大將の陣へ切てかゝり、本陣を切崩すべし、をこたる事なかれど、左右を下知して、二手に合て一手は大野木安養寺上坂刑部以下の荒手を以て、敵の先陣蒲生が勢を一あて當ければ、あむのごとく荒手にかい合唯一まくりにまくりつけられ、悉く引退き蒲生が一門伊勢の千草爰にて打死し、其外皆敗軍しける、浅井備前守もせい兵をすぐり、敵の本陣へ切てかゝりければ、大將義賢忽に打まけ引退き給ふ、浅井方きはひて追かけたり、備前守長政再拜取て味方に敵を見合に、九牛が一毛にも及ざる小勢なるに、あはれ味方はすぐれたる兵ごもかな、さりながら敵は大勢なり、長追すべからずと下知しけり、義賢方大將の敗軍の上は、士卒も一陣も不殘引退きけり、浅井がたへ打さる首九百二十と注したり、然れども浅井方も手いたき軍して打死四百あまり、手負も三百餘人有ければ、是より引返して本の處に本陣をすへ、わけ目の合戦に浅井打勝のみならず、愛智川より北を打隨へて、北國の朝倉と申合らる

、朝倉も今度加勢の爲に、いこの朝倉式部大輔に五百餘騎相添て、浅井郡まで發向しけれども、浅井勝軍なれば、皆々よろこび歸りける、其後北近江の城ごも、のこらず浅井が下知にしたがひけり、佐々木義賢やすからぬ事に思ひ、其後も北郡へ兩度迄人數をいだされけれども、是を聞て朝倉よりも加勢あり、浅井もゆだむなく防ぎければ、毎度南郡の兵打負、蒼坂美濃部和田高峰望月なむと、云者皆浅井方へうちとられけり。

## 第六十二章 浅井長政の屋守城攻撃満島孫市の戦死

野良田の一戦に勝利を得し浅井長政は、佐々木承禎父子軍の退南後は餘威を揮ふて平井加賀守定武の平井城を攻めんとし、高野瀬秀隆赤田定興等を指揮して兵を進む。先づ屋守城に杉立高政父子を攻む。刈間の館主満島孫市は杉立氏の與力なれば、變を聞て來り援けしに衆寡敵せずして奮戦々死す。高政等城を出で、平居の平井城に奔る。浅井勢屋守城を占領す。八木莊村大字矢守は屋守氏に在城の所にして城趾猶存す。



第六十三章

佐々木義弼百濟寺山林四至封

境を安堵せしむ

永祿四年九月佐々木義弼は百濟寺山林四至の安堵と隣郷人の亂入伐採を禁止する折紙を同寺に與ふ。平井定武等其命を同寺に傳ふ。前記せし永正九年伊庭出羽守貞隆の安堵狀を繼承したるものなり。義弼後ち名を義治と改む。

同寺文書

當寺領知之事

東者筒井峠、南者牛王磐石岩、豐國野櫻木庭、長尾、彌七垣内、西者一水口、北者石佛谷、當知行不相紛之由、先年度々被成奉書訖、則領内之儀、被裏封上者、彌向後不可有相違、猶以押立其外從所々、山木於盜取者、堅可被申付由、被仰者也、仍執達如件、

永祿四年九月廿三日

賢 廣花押  
定 武花押平井氏

百濟寺

政所坊

第六十四章

小倉右近太夫の亂

永源寺一山灰燼となる

永祿六年十月一日佐々木義弼其臣後藤賢豐父子を觀音寺城下に誘殺す。賢豐父子は佐々木義賢以來の重臣にして勢望あり。偶々義弼に賢豐父子野心ありと讒するものあり、義弼之を信じ即ち父子の登城を促し、竊に腹臣建部日向守、種村三河守等に命じて途に之を殺さしむ。變報四聞し、義弼の父義賢始め其亂暴に驚く。進藤目賀田三井、馬淵伊庭、檜崎平井、永原池田、横山三雲等の諸將、義弼の暴舉に忿慨し、各々城中の自邸に放火して所領地の本邸に歸る。觀音寺本堂以下一山も類焼し、石寺の城下町も灰燼し、山上山下荒涼の巷と化せり。義弼身を處するに窮し、去て日野城に入り、蒲生定秀に據れり。之を觀音寺騒動といひやがて近江國亂と化し、佐々木氏四百年の社稷も頓に軽く危くなる因となれり。

小倉氏は當郡小倉庄を根據として榮えし古き名族なり。然れども時代の經過につれ一族漸く多岐となり親密なるべき一族間も戰國の惡思想にかふれ事によれ物によりて互に反目することとなり。又經濟問題等の爲に意志の相反するものもあ



りたり。其時に當り觀音寺騷動は勃發したり。永源寺は佐々木氏頼開基し爾後代々の佐々木氏が尊崇維持に勉めたる所、今や反佐々木氏の士は遂に此の禪刹に向ふても迫害を加へんとしたり。小倉右近太夫の亂是なり。

窮鳥佐々木義弼は日野城に入りて蒲生定秀に依頼せり定秀其子賢秀と共に佐々木氏の爲に謀り諸將を説きて時局集拾の策を回らせり。此時に當り小倉同族間に權勢爭奪の事起りたり。其亂因については永祿七年の秋永源寺の納所なうしよ周徳、合空院の納所祖悅の兩人より備後の永聖寺へ寺災を報せし書中に、

就中、當國不慮之外騷敷寺家外護之且越、庶子惣領之間、依不安、當山諸寺庵嬰乎兵燹、悉成焦土、衆僧各離散、東漏西沒、憐察云々、

の一句あり。外護且越たる小倉一族が嫡庶の争に因して寺は放火の災を招きしを云ふ。又近江志新開略記に左の記事あり。

小倉氏の嫡家は山上村ニ在城ス、小倉將監以來代々領主也、天文年間以後同苗兵庫介、左京介、右京介、一族タカイニ不和ニ成リ、同士軍ヲイドミ、左京介ハ愛智郡九居瀬村山ニ楯籠リ、永源寺ノ衆僧ヲ頼ミ語ラヒケルト云フ城跡アリ、兵庫介ハ後三河守良秀ト云フ、小倉村ニ住ス、

右京介ハ後ニ左近進良親ト云山上村ニ住ス、然ル所左京介ガ永源寺衆僧ト合體シテ九居瀬山ニ楯籠リシヲ怒リ、永祿六年三月ニ山上ノ寺庵不殘熊原ヨリ放火ス同七年五月廿三日永源寺ヲ不殘燒亡ス、

退藏寺ノ左京介居城モ此トキ攻落ス、故ニ左京介ハ尾州ニ行ト云フ、一本ニ兵庫介ト三河守トハ別人ト云、

とあり小倉一族の名稱と永源寺放火の月日に相違あるも左京介は佐々木及び蒲生氏と連絡したる小倉一家の主なるべし。その永源寺と連絡して九居瀬山に據り依りて右近太夫等の反抗を招き牽て永源寺を災せしものなり。按ずるに此の同族反目の裏面には必ず永源寺々領下司職等の競望にて經濟問題の怨みを助長したるものなるべし。其の戦況を詳述すれば小倉右近太夫は永祿六年十月二十五日先づ永源寺の四刹にしてその溪口に在る永安寺谷に放火す。爾後小康を得しに翌七年三月に至り右近太夫は更に一味の徒黨を集めて左京亮と行動を共にする蒲生氏等に抗す。蒲生氏は部下の諸將士や左久良城主蒲生郡東櫻谷村小倉三河守實隆、等をして出て、右近太夫の軍を征す。十六日兩軍和南山及び其附近に會戦し互に殺傷あり。此日右近派の將甲津畑勘解由左衛門は敵小倉次兵衛以下を討取りたり。佐々木義弼は速



水氏に感狀を與へて其戰功を賞す。

日野町西田先兵衛氏文書

注進旨得<sub>二</sub>其心候<sub>一</sub>和南山ニ小倉次兵衛尉其外數多討捕由尤以高名無比類候重以書狀可申候委細大河管介入道可申候謹言、

三月十六日

義

弼花押

速水勘解由左衛門尉殿

此日の戰は頗る激戰なりしと見え蒲生氏の將小倉三河守實隆も陣中に屍を晒したり。謚して玖翁秀公といふ。同年十二月實隆の畫像就り前建長寺の住持たりし竹圃に贊辭を請ひ之を仲明寺左久良にありに納めたり。其贊中に靈俣有光凌蔑棘門二三兒戲、功成名遂、領旅柳營、十万雄圖、命失身喪云々とあり。又天正八年三月十六日十七回忌辰に當り寺主秀玉が前永平寺の寶室を聘して導師とし供養したる香語あり。其語中に天正八曆上章執徐三月十六日、伏值前三州太守玖翁秀公禪定門一十七忌之辰、云々と記し三月十六日を正當忌日とするは此戰の記念史料なり。三月十六日の戰は右近の勝利に歸したり。勝に誇れる右近の軍は同月二十三日永源寺の塔中なる永安、興源、退藏の三寺に火を放ちて燒亡せり。

佐々木氏と小倉右近太夫蒲生氏と小倉左京介との對抗は其後猶繼續され五月一日には左久良に一戰あり。寺倉氏の被官園城式部丞は右近太夫黨として敵首を討取り之を佐々木義弼の陣に送る。義弼感狀を與ふ。

蒲生郡東櫻谷村柚井上泰次郎氏文書

去一日於左久良表被官園城式部丞及一戰敵討捕首一到來、尤高名神妙之働候軍功之旨心得可被申聞候也謹言、

五月三日

義

弼花押

寺倉吉六殿

小倉宗家に大打撃を與へし小倉右近太夫は五月二十三日更に永源寺に迫害を加へ本堂、合空院、曹源寺、及龍門以西の諸庵に放火したり。滿溪の炎焰天に沖し佛像什器悉く灰燼す。災餘殘る所只識蘆谷の一部に過ぎざりき。左記永源寺文書は其年七月二十八日仙溪庵の僧惠海が記せし實錄にして當時一山燒亡の狀を明にす。

永源寺文書

條々

一永祿六年十月朔日依後藤但馬守父子共生害、七人之男衆被謀叛申、則太守被成御

第六十四章 小倉右近太夫の亂永源寺一山灰燼なる



宰人候就其山上惣寺家中放火之事、

一六年十月廿五日ニ小倉右近太夫より永安寺谷中放火候、

一同七年甲子三月廿三日橋より口永興退三ヶ寺悉放火之事、同右近仕候、

一同五月廿三日、自橋奥、永源、含空、曹源三ヶ寺并龍門より口之諸各庵悉右近より放火候、

一相殘各庵は、谷、識蘆谷第一寺までにて候、

永祿七年甲子七月廿八日書之

江州山上仙溪庵内惠海白

永源寺文書

將亦貴國國々も錯亂之由無元心存候、然而貴寺無相違趣、尤可然候、目出期後音之時候、

謹奉答、抑態被狂信使並尊贖、整衣薰誦、再三罔措矣、珍重、特香資一緡、洛中祇園本願宿坊迄被相届旨、定好便次第、可有寺着候、恩惠厚志有餘者乎、衆悉均慶不些候、御使僧度々御登臨、重山、複水、脚跟下、長途之勞痛入存候、以何謝焉、就中當國不慮之外、騷敷寺家外護之、且越庶子總領之間、依不安當山諸寺庵、嬰乎兵燹、悉成焦土、衆僧各離散、東漏

西沒憐察々々、以故開山二百年忌之事、中々不及其沙汰無是非題目候、寂室之威風、這回破滅之瑞相迄候、雖然、寺産者無相違候條、於靜謐者、聽而可有再興候、然者諸門徒中、可爲勸進候條、貴寺御衆中至末派、僉々被仰談、各以一壁御奉加簡要候、猶追而可得尊慮候間、不能縷陳候、折節急候條、書中倉卒、恐多候、恐惶再拜、  
(永祿七年) 孟秋廿又八莫

永源寺納所

周

徳花押

含空納所

祖

悦花押

拜復

永 聖 寺……(備後國)

侍衣閣下

文中一山荒涼の狀を悉し開山寂室の業も亡びんかと痛嘆し、幸に寺領は無事なれば平和後には寺の再興も計畫さるれば勸財の盡力を請ふといへり。東小椋村大字九居瀬現在の退藏寺の西に聳ゆる一峰を城跡と稱し麓を城の腰といふ。當年小倉左京介の據りし砦趾なり。



近江愛智郡志 卷一終

昭和四年十月十五日印刷  
昭和四年十月二十日發行

〔非賣品〕

滋賀縣愛智郡教育會

京都市下京區北小路新町西入

印刷者 須磨勘兵衛

京都市下京區西洞院通七條南

印刷所 内外出版印刷株式會社



4L-70

中華民國十年十月二十日發行

（非賣品）

臺灣總督府教育會

總發行所 臺北 總督府教育會

分發行所 基隆 基隆教育會

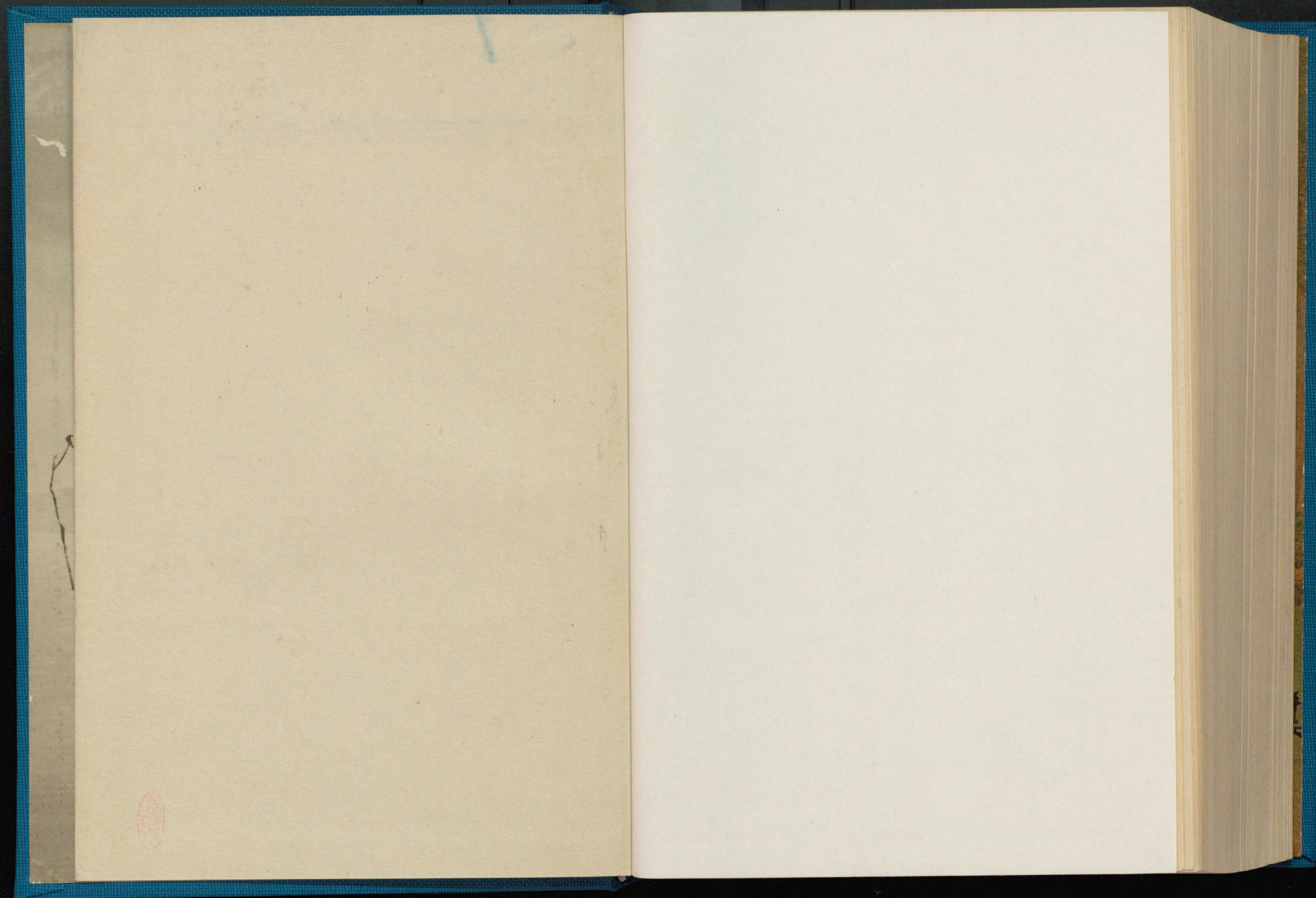
分發行所 新竹 新竹教育會

分發行所 嘉義 嘉義教育會

分發行所 台南 台南教育會

分發行所 高雄 高雄教育會







24270



子昂  
畫於蘇州





